
逃げる16の夏

妄想筆者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げる16の夏

【Nコード】

N2652V

【作者名】

妄想筆者

【あらすじ】

主人公、北村敦は何処にでもいる平凡な高校生。

そして似非ミリタリーマニアでもあった。

彼はひそかに願う。

「こんなつまらない世界、はやく終わってくれ」と・・・

彼の願いは皮肉にも叶えられることになる。

『奴ら』によって・・・

平和な日へ 平和だった日 (前書き)

どうも、はじめまして！

筆者は初心者なので読みにくいところが多々あるとは思いますがそ

こはスルーで(笑)

今回は第零話みたいところです。

さて、と。

これからよろしくお願いします！

平和な日へ 平和だった日

2013年7月7日

要するに七夕。

俺 - - - - - きたむらあつし北村敦 - - - - - と親友のつしまたいき対馬大樹は坂道を自転車で駆け上がっていた。

・・・この坂道・・・急すぎだろ・・・

俺はバリバリの帰宅部で運動能力は平凡、知能も平凡。おまけに自称ミリタリーオタクの触りだけなのだ。

とにかく中途半端な俺の先に行く対馬はハンドボール部で一年のくせにレギュラー入り。

ポジションはゴールキーパーでかなり優れた瞬発力を持っている。ちなみに俺達を通っている高校は私立浦宮高校で学力は平凡。

しかし、運動に力を入れているらしくどこの部活も活発で必ず県大会は行っている。

そしてこの学校はハンドボール部を特に力を入れているらしく、全国大会優勝経験もあり。

対馬は中学校の時もハンドボールをやっておりその才能が買われ、スポーツ特待生として受け入れられたと。

今日は日曜日でハンドボール部はお休み。なので二人で何処か遊びに行こうとなったのだ。しかし・・・

「あつちいなあ」

俺はそう言い額に滴る汗をぬぐう。

「ほんと暑い暑い」

今日の気温は34度。
そういや女子アナが今年一番とか言ってたな。
言ってたっけ……？
忘れた。

くそ暑い中僕達はアスファルトの上に立ち尽くしていた。

「なあ敦……一体どこ行くんだよ？」

「あー決めてない」

暑い……

「こんな暑いところにいるのもなんだからあそこに行かないか？」
対馬が指差したのは図書館らしき場所だった。

「あーそうだね……了解」

俺達は図書館へと自転車を走らせた。

「うひょー涼しい！」

「生き返る〜」

俺達は口々にそう言い中へ入っていった。

俺はあるものが目にはいった。

『笹』だった。

そういや今日は七夕だったけ。

「なあ、対馬。せっかくだから願い事書いていかないか？」

「お、いいねえ。書こう書こう」

俺達は受付係のおばちゃんから短冊を一枚貰い、願い事を書くことにした。

さて、何書こうかな……

隣で対馬はなにかせつせと書いている。

恐らくハンドボールのことか何かだろう。

あ、そうだ。

「退屈な毎日が終わりますように・・・っと」

俺はそう書き笹に括りつけた。

「対馬終わった？」

「ああ、終わった」

対馬も笹に括りつける

「敦・・・お前今の人生じゃつまらないと？」

「ああ、つまらないね」

「・・・お前らしいな」

俺達は図書館を後にした。

俺達は帰りにバツティングセンターによって大騒ぎして楽しんだ。

その後俺の『お願い』は皮肉にもかなうことになってしまった。
最悪の形で。

今なら俺は声を大にして言える。

「あんな願い事、書かなきゃよかった」と・・・

平和な日常はいつまでも簡単に崩れていく(前書き)

ども。

今回は長くなりそうですねえ。

そんじゃまごうぞー！

そういえば時間かいてませんでしたww

なので追加します。

平和な日常はこつも簡単に崩れていく

2013年7月17日午前11時頃

三時限目は体育で種目は野球だった。

我が1-Cは二つに分けられ紅白戦を行っていた。

2アウト

満塁

打者は俺バッター - - - - - 北村敦 - - - - - だった。

「おい、敦！絶対打てよ！」

そう叫ぶのは我が親友対馬ライバル。

畜生。いい気になりやがって。

「お願い！打って〜！」

俺に応援を振り掛けるのは飛驒陽子ひたようし。

成績優秀、メガネっ子。

身長は160前後で髪は後ろで縛っている。

「おい！敦！打てなかつたらどうなるのか分かってるんだろっな？」

男勝りな口調なのは石田由美いしだゆみ。

その性格が災いして「男」とか「肩幅」と言われたりするスポーツウーマン。

身長は170前後であだ名の通りガッツリした体格。

・・・たぶん対馬にも劣らない。

髪はショートカットで運動の邪魔にならないようにしているらしい。

ちなみに、北村敦、対馬大樹、飛驒陽子、石田由美、四人合わせ
て「TBSチームバカ騒ぎ」と呼ばれている。

・・・テレビ局じゃないよ。

さて、相手投手は野球部の控え投手。
控えとはいえど野球部だろ？
そんなガチで来るなって。

一投目。

ストライク。

ど真ん中だ。

僕はそれを見逃した。

二投目。

心地よい空振り音。

もちろんストライクです。

いとも簡単に追い詰められてしまった。
どうする？自分。

このまま負けると石田に何されるか分からんし・・・

考えているとふとあるものが目に入った。

それはフェンスの先で行列を作る軍団だった。

なにかの移動だろうか？

しかしおかしい。

全員がそれぞれほかの方向を向いて手を前に突き出している。

服もポロポロじゃないか。

あ、一つ言い忘れたけど俺の視力は両目1・5以上で視力だけなら
トップクラスだからね。

「おい！敦！集中しろ！」

その声で僕は我に返った。

よく見る俺もう投手は投げる体制に入ってるじゃないか！

「やばー！」

俺は無我夢中でスイングした。
ああ、後のことは予想できる。
ボールはミットに入って全員から罵声を浴びさせられて・・・
ん？
ボールは？
なんでみんな喜んでるんだ？
あ、あつた。ボールだ。
そのボールは投手を超え、二塁を超え、センターを超え・・・
フェンスを越えた。

「ホームラン？」
よっしゃああ！よくやったぞ敦！
その他大勢の声が聞こえてくる。
どうやら今日についてはうれしい。
これで石田に殺されずにすむ・・・
しかしこれは最後の喜び。
数秒後にはどん底に突き落とされた。

「あ」
打ったボールはフェンスの先の軍団にいた一人に当たってしまった。
そのボールに群がる人々。
幸いあたった人はボールを凝視しているところを見るとたいした怪
我はなかったらしい。
「おい、北村！今から謝りに行くぞ！お前も来い！」
体育の教師が言う。
そりゃそうだよなあ。
僕は反省しながら体育教師の後についていった。

その軍団は校門の前に群がっており俺と教師は駆け足で謝りに行
った。

「先ほどはすいません。うちの生徒がとんだご迷惑を……。北村、お前も謝れ！」

「すいませんでした」

俺は深く謝罪した。

しかし。

何かおかしい。

その軍団は何も反応しない。

しかもうめき声を上げながらこっちに近づいてくる。

俺はつい後ずさりをしてしまった。

体育教師も不審に思ったのか、

「あの、大丈夫ですか？」

その声を掛け手を差し出した。

次の瞬間……

その軍団の一人が体育教師の差し出した手に噛み付いたのだ！

「ぎゃあああああ！！！！！」

体育教師は悲鳴をあげながら振り払おうとしたが軍団が押さえつけ

そのまま喰われてしまった。

「あ、あああ……」

俺は情けない声を出しながら一步後ろへ下がる。

後ろからは生徒達の叫び声が聞こえる。

30秒ぐらい立っただろうか。

いきなりその軍団は体育教師を喰らいつくのをピタリとやめこちらを向いた。

すると喰われていた体育教師が立ち上がりこっちを向き歩き出した。

ゾンビだ……！

俺はそう判断すると一気に振り返り全力でクラスメイトの元へ駆け出した。

これが終わりの始まりだった。

全員武器を取れ！そして逃げる（前書き）

今回は前書きに登場キャラの説明でも書きましようかね？
え？ありきたりすぎだって？

そんなこといわずに見てくださいよ（笑）

北村敦

体力

知力

気力

協調性

リーダー性

今作の主人公。

高校一年で全てにおいて平均というある意味珍しい。

似非ミリタリーオタク。

TBS（チームバカ騒ぎ）のリーダー的存在で人望も厚い（TBS
だけね）

全員武器を取れ！そして逃げる

2013年7月13日午前11半頃

「校舎に逃げ込むぞ！」

誰かが発した叫びによって動けなかったクラスメイト全員はパッと散らばる蜘蛛の子のように逃げた。

「TBS！待て！待つんだ！」

俺が走りながらそう叫ぶとTBSはピタリと止まった。皆、動揺こそはしているが取り乱してはいないようだ。

「ねえ！何あれ！？」

飛驒が問いかける。

「恐らくゾンビだと思う」

「ゾンビだつて！？そんなフィクションなもの・・・」

「対馬。今はノンフィクション。これは現実だ。」

俺の言葉に対馬は口を紡ぐ。

「とりあえずよお！どうすんだよ！あいつらゆっくりだけど近づいてきてるぞ！」

振り返るとあいつらは約50m先まで来ていた。

「いいか？俺の言うことをよく聞けよ？まずは皆バットを持って。そして奴らが近づいてきたら容赦なく頭を殴るんだ」

一呼吸おいて

「いまから一階の一番端の部屋。保健室に行く。いいな？」
首を縦に振る皆。どうやら同意のようだ。

「よし・・・じゃあ走るぞ！行くぜ！チームバカ騒ぎTBS！」

「おっ！」

俺達は歩く死体から逃げるためにとりあえず保健室に身を隠すことにした。

何故保健室にしたかつて？

フフフ。

これは俺の作戦だよ。

「みんな入ったな！？じゃあ扉を閉めるぞ！」

俺は全員の無事を確認し、扉を閉めて鍵を掛けた。ふう、というため息と共に全員が座り込む。

「ちよつとみんな聞いてくれ。あいつらは恐らく目ではなく、かなり優れた聴覚と嗅覚をたどって獲物を探すんだと思う。だからあまり大きな音は立てないでくれ」

石田が手を上げて、はいはい、先生質問です、と問いかけてきたのでふつてみた。

「はい、石田さん」

「あのさー、なんで一階の保健室に隠れることにしたんだよー？上の階のほうに逃げやすくないか？」

うむ。それも一理あるな。

「理由としては上の階に行くとかほかの生徒の混乱に巻き込まれる可能性がある。その混乱を聞きつけたゾンビたちは上の階に行き一階の端までは来ないと思ったからだ」

ほお〜と全員が相槌を打った。

「それにここに来たのはもう一つ理由がある。ここにある消毒液を全部入り口にまけば俺達の臭いが消せると思ったからだ」

またはーいと手が拳がった。

飛驒だ。

「でもさ、アルコールだからすぐに消えちゃわない？」
「そんなにここに長居するつもりはない。ただの休憩だ。もう質問はないか？ないなら消毒液撒くのを手伝ってほしいんだが」
誰からも手は拳がらなかった。

その後、俺達は全員で消毒液を入り口にぶちまけた。

第一回ゾンビ対策会議（前書き）

今回もキャラ紹介です。

対馬大樹

体力

知力

気力

出番

親友

敦の親友・・・なのに
出番が少ない。

運動神経抜群のハンドボール部G K

イケメン（嫉妬）
爽やか（嫉妬）

第一回ゾンビ対策会議

「それでは第一回ゾンビ対策会議を始めます」

一同なんとなく礼

「さて、まずは今分かっていることをリストアップしてみた。ちょっと見てくれ」

- ・ゾンビが現れた
- ・ゾンビに噛まれるとゾンビになる
- ・頭を潰せばなんとかなる
- ・ゾンビは視覚はない
- ・学校内には沢山のゾンビ

「あとこれはネットに書いてあったんだがゾンビは関東内にしか出沒していないらしくそれ以上の被害は食い止められているようだ。そしてやはりゾンビは優れた嗅覚と聴覚を持っているらしい。以上」

しーん

・・・なんだこの空気は。

「次に今使えそうなもの、ここにあるものをリストアップしてみた」

金属バット（四本）

携帯電話（全員所持）

財布（全員所持）

飲料水（500mlペットボトル8本。保健室にあった）

救急セット（一箱。保健室にあった）

地図（保健室にあった）

担架（保健室にあった）

「こんなもんだろうか」

しーん

「おい、みんなどうした？暗いぞ？」

「いやなんか『喋ったら負け』みたいな雰囲気か漂っていたから・・・」

飛驒が思い出したように聞く。

「ねえ、これからどうするの？関東を抜け出すもここは埼玉よ。ど真ん中じゃない。関東から逃げ出すのはかなり時間がかかるわ」

ああ、そのことが。

いつか聞かれるとは思ってた。

「そのことなら大丈夫だ。今関東内各地で避難所を作ってるらしい。その中でも特に広い場所に自衛隊の避難ヘリが救助に来るらしい」

今、確かにこの部屋の空気が和らいだ。

絶望のどん底に落とされていたが、少しの希望が見えたからだ。

俺が地図を開くと皆が覗き込んでくる。

「一番近い救助ヘリが飛んでくる場所は・・・ここだな」
俺が指差したのは・・・

「蓮田製薬か。ここなら車で二日、かな？」

「車で二日・・・アタシ達車もってねえぞ？どうすんの？」

確かに。歩きだと絶望的だ。

しかし手は打ってある。

「うちに行こう。ここから歩いても二十分程度だ。うちの近くは人通りも少ないし、ゾンビもいないだろ」

今度は対馬が常識論で攻めてきた。

「敦の家の車を使う、と。でもいいのか？勝手に使って？」

「ああ？今は緊急事態だから仕方がないだろ」

「そうじゃなくて、家のひ」

「家族なら亡くなった。二年前の地震で」

「・・・すまん」

「いや、いいさ。もう二年前のことだ」

「でも敦はずっと埼玉育ちじゃない？埼玉はそんなに被害はなかったはず」

「そのことは・・・今は時間がない。家に着いたら話そう」

全員が立ち上がりそれぞれの準備を始めた。

俺は鉄バットとバツクの中に飲料水やらなんやら詰めることにした。

全員の準備が終わるとみんなが僕の周りに寄ってきた。

「じゃあ編隊を確認するぞー」

「・・・変態？^{スケベ}」

「違います」

「変態とは石田のようなことを言います」

「アンタ・・・それを本気で・・・」

「すみませんでした」

石田は・・・土下座したらバットで殴るのは許してくれた。
まあ蹴りは入ったけど。

「じゃあ気を取り直して・・・先頭で担架を使い軍団の間をこじ開けるのは石田。次に石田のフォロワーが俺。そしてその後は飛騨で

最後が対馬」

はい先生質問です、とまた石田が。

「はい、へ・・・石田さん」

「なんでアタシが先頭なんだ？」

「そりゃ肩幅の実力を見せ・・・すいませんでした」

さすがにこれはまずかった。

だてバット振りかぶってたもん。

「でもこれがベストな編隊だと思う。だから石田よろしく頼む」
「わかったよ・・・」

「皆の者！まずは俺のうちが目標だ！」

「おう！」

「いくぜ！TBS！」
チームバカ騒ぎ

「よっしゃああ！」

と、いう掛声と共に石田が思い切り保健室のドアを開けた。

さあ、生き残りを掛けた戦いの始まりだ。

第一回ゾンビ対策会議（後書き）

この小説は書ける時に書くという完璧な不定期更新です。

長い間放置されてもいつか帰ってくるかと信じて待っていてください

（笑）

今は教育を受ける権利より生きる権利をください。(前書き)

さて、今回は石田ですね。

実はこいつのモデルになった奴がうちの学校にいて
僕もそいつには頭が上がりませんww

石田由美

体力

+

知力

気力

男

暴力

+

身長170前後。

運送神経バツグンで破壊的。

男勝りな性格が災いして「男」とか「肩幅」と呼ばれる。

TBSの兄貴担当(女だよ!?!あくまで女だよ!?)

今は教育を受ける権利より生きる権利をください。

ドア思い切り開けた俺達は意気消沈した。
だつて……

「ゾンビ、いねえな」

どうやらゾンビは一匹もないようだ。

「よし行くぞ。なるべく足音立てるなよ」

そろーり、そろーり……

ガバツ！

となることもなく俺達はいとも簡単に玄関に着くことができた。

「みんな靴履いてけよ。上履きで出たらフルボッコだからな」
皆が靴を履き替えたのを確認すると俺は校庭を見た。
数十体のゾンビがいたが、これくらいの数なら何とかかなりそうだ。

「よし、準備はいいか？」

首を縦に振る。同意の合図だ。

「ステンバイイ……ステンバイイ……」

「マクミランですか!？」

対馬の突っ込みを無視しつつ、

「ゴー！」

俺が玄関の扉を開け石田が担架を押して突き進む。
その後を俺が追い、その後ろを残りの二人が走る。

これが初陣デビューかあ。

ちよつとわくわくするなあ。

「うりやああああ！！」

石田が担架を押しゾンビを吹っ飛ばし穴を開ける。

そして俺達が横から襲ってきそうなゾンビを倒す。

うーむ。金属バットを選んだのは正解だった。

振りやすいし、確実にしとめられる。

我ながら完璧な作戦。

石田の活躍あつて俺達はなんとか俺達は校門にたどり着くことが出来た。

「みんな手伝えっ！校門を閉めるぞ！」

ギィーという鈍い音を立てながら閉まっていく校門。

かくして俺達は校内にゾンビを閉じ込めることに成功した。

「後は敦の家に行くだけか」

「そうだな」

そのはずだった。

「ちよつと・・・助けて！」

なんとまだ校内に生存者がいた。

「置いてくしかないな」

小さな声で対馬が呟く。

そうだろう。

それが最善だ。

「行こう」

対馬が校門に背を向ける。
しかし。

「ここで逃げたら男じゃないぜ！」

校門を駆け上がり校庭に降り立つ影あり。

石田だった。

「……ってあなた男じゃないでしょ。」

「仕方がないなあ」

気だるそうに声を上げ校門をよじ登るのは俺。

「おっ、敦。お前は男になるのか」

「元から男です」

鉄バットをぎゅっと握り締める。

俺は振り返り一言残していくことにした。

「対馬！飛騨！俺達があの子を助けたら校門を開けてくれ！もしや
られたら……その時は……逃げる」

そしてゾンビたちに向きなおして一言。

「行くぞ！」

その掛声と共に石田と俺はゾンビたちに向かって走り出した。

女の子を囲んでいるゾンビは六体程度。

女の子はなにか長い棒を振り回しゾンビを近寄らせなかった。

「石田！とりあえず一人三体ってことで！」

「了解！」

短い会話を終えた後ゾンビを片付けることにした。

まずは助走をつけていたので飛び蹴り。

バランスを崩したゾンビを頭にバットを一振り。

そして一方後ろに下がりゾンビとの間合いを作る。

「めええん！」

と、ゾンビの頭をかち割る。

・・・あ、俺言っとくけど帰宅部だからね。

決して剣道部じゃないよ。

そして最後のゾンビには思いつき振りかぶって特別なのを・・・

ピタリと止まった。

結果俺はそいつを殴れなかった。

何故ならそいつの顔に見覚えがあった。

そいつはクラスメイトの一人だった。

別に親しい仲ではなかったが、ゾンビも一人の人間だったことを認識してしまった。

そいつの腕が俺に迫ってくる。

俺もこいつらの仲間入りか・・・

覚悟した。

しかし。

バキイ！

という鈍い音と共にそいつは地面にひれ伏せた。

「敦、何やってんだよ！危なかったじゃねえか！」

「ああ、すまん」

そうだ。

たとえ元は人間だとしても躊躇無く殺っていかないとこっちが殺られる。

「とりあえず・・・全滅だな。逃げるぞ。走れるか？」

俺がゾンビに囲まれていた女の子に声を掛けるとその子はコクリとうなずいた。

「よし、退散だ！」

俺達は校門へ走った。

「お帰り！大丈夫？怪我は無い？」
「ああ、大丈夫だ、飛驒。この通り生きてます」
結果俺達は女の子を助けることが出来た。
とりあえず歩きながら俺達はざつと自己紹介をすることに。

「俺は北村敦。隣にいるのは対馬大樹。そしてこのでかいのが石田由美。そしてこの眼鏡が飛驒陽子だ」

「ふーん・・・」

「君はなんていうの？」

「私は佐伯伊那^{サキベエナ}。三年生よ。」

・・・え？

今、なんと言った？

「三年生・・・？見た目は・・・ねえ？」

「私は三年生よ！」

いやいや、だって身長は・・・

「150cmよ！悪い！？」

こんな感じで新たに一人仲間が加わった。

今は教育を受ける権利より生きる権利をください。(後書き)

そつえばお気に入り登録してくれた方がいたそうで。

本当にありがとうございます！

こんな駄文ですが未永くお願いします。

元気の源はご飯から（前書き）

いやー疲れた。

今日はほんとに疲れた。

だから何？つて感じなんですけどねww

飛驒陽子

体力

知力

気力

不思議

+

A・K君が好き 未知数

成績優秀、眼鏡キャラの不思議ちゃん。

身長は160cm前後で髪は後ろで縛っている。

主人公のA・K君が好きだとか嫌いだとか！？

元気の源はご飯から

俺達は学校から出て家に向かったのだが・・・

「うわ・・・酷い・・・」

異変に気づいたのは約一時間前なのに町はいまや壊滅していた。車は壁に突っ込み炎上し、腐臭が漂っていた。

「俺の家はこの先だ。人が少ないから襲われることは無いとが救助も来ないだろう」

そう、俺の家は商店街を抜けた先にあつて、商店街を抜けると家がほとんど見えてこない。

歩くこと約十分。

「ここが俺ん家だ」

普通の家となんの変哲も無い家。

例えるならば「どらもん」の家ぐらいだろうか。

「おじやましーす」

「一人暮らしにはもつたないわね・・・」

「さて、対馬。俺と一緒に雨戸を閉めてくれ。飛騨と石田はなんか飯でも作ってくれ。冷凍食品、保存食品以外だったら何使ってもいいぞ。あ、あと家の庭に野菜植えてるから」

「ちよつと！私は何すればいいのよ!？」

「え？佐伯先輩（笑）は・・・じゃあ情報集めでもしてて」

俺と対馬は二階に上がって雨戸を閉めることにした。

「なあ、敦……」

「なんだ？対馬？」

「お前……石田のことどう思う？」

「そりゃ男で、暴力的で……っってお前まさか！？」

「い、いや！そうじゃなくて！」

このタイミング！？

このタイミングですか！？

「そうじゃなくてさ……」

「おもいつきり恋バナにしか聞こえないんですけど？」

「俺さ……ここから脱出したら告白す……」

「やめとけ！それ以上は死亡フラグだ！」

危ない危ない。

対馬は死なれては困る。

「まあ、でも意気込みがあることはいいことだ。でもその意気込みは心にしまっとけ！」

「わ、分かったよ……」

しづしづ対馬を了解させると俺達は一階のリビングに降りた。

現在時刻は十二時過ぎ。

完璧な昼時なのに全く腹が空かない。

俺はテレビをつけ音を小さくした。

ゾンビがよってくるかもしれないからだ。

どのチャンネルに変えてもゾンビ速報。

俺はテレビを静かに消して、ソファにドカツと座った。

「なんか疲れたな・・・」
「そりゃそうだろう。」

野球やって、ホームラン打って、ボールぶつけて、謝って、実は謝ったのがゾンビで、保健室に逃げて、担架使って教皇突破して、最終的に佐伯先輩を助けて・・・

そんなことを考えているうちに俺の意識は闇に引きずり込まれた・・・

夢を見た。

二年前の地震の日。

俺達家族は岩手の海辺でキャンプをしていた。

学校は開校記念日。

楽しい三日間になるはずだった。

まさか家族が俺を残していなくなるとは。

「お・・・お・・・て、起きて！」

その声で目覚めた。

「どうしたの？うなされてたよ？」

飛驒が俺の顔を覗き込んでくる。

「ああ、二年前のことを思い出してな・・・」

「・・・ごめん」

「いや」

別に飛驒のせいじゃない。

「二年前、俺達家族は岩手の海辺にキャンプに行ったんだ」

飛驒は絶句した。

それから俺は全てを話した。

「そう、だったの・・・」

「みなさんご飯できましたよー」
空気の読めない石田さんへんたいが・・・『鍋』を持ってきた。

『鍋』！？

「おいおいおいおいおい！何故こんな暑い中鍋を作った!？」

「いやー、請った料理なんて出来ないし。つーかお前も寝てないで手伝えよ!」

そうか。それは俺が悪かった。

って違うでしょ！

「俺のせい!？俺のせいなの!？」

「対馬は手伝ってくれたよ」

対馬は壁にもたれかかってニヤニヤしている。
高感度上げようってか・・・

「とりあえずつべこべ言わずに食べ!」

ドンツと置かれる茶碗。

あーあ、そんなに乱暴に置いたら割れるって。

「頂きまーす」

五人の楽しい食事が始まった。

石田が作った鍋は・・・キムチ鍋だった。

いじめ!？ここまでくるといじめにしか思えないんですけど!

「食いたくないなら食つな」

心を読まれた!？

なにはともかく意外とキムチ鍋はうまかった。
久々に女性の（対馬も少し）手料理なんて食った。
一人暮らしだと色々あるからな。

これで『奴ら』がいなかったら最高なのになあ。

元気の源はご飯から（後書き）

最近胸が苦しくて・・・

これって恋！？

え？違いますか。そうですね。ハイ・・・

火炎瓶を作りましょう(前書き)

なんか一日一回ペースになってきましたねww
評価、待ってますよー

佐伯伊那

体力
知力
気力
チビ
空気

+

身長150cmのチビなくせに三年生。

数少ない校内での生存者。

でしゃばることも多いが、たまにはいいこともする(多分)。
空気度ナンバーワン。

火炎瓶を作りました

俺は二階の自分の部屋から双眼鏡を使い監視していた。

誰かが監視でもしてないとおちおち眠ってられないもんな。

時刻は早朝四時頃。

階段から足音が聞こえる。

その足音は俺の部屋の前で止まった。

ゆっくりとその扉が開く。

「・・・交代だ」

「対馬、時間ぴったりだな。じゃ、後頼んだぞ」

見張りはシフト制にしてある。

さて俺のシフトはもう無いからリビングで寝てるか。

俺はゆっくりと階段を下りる。

リビングに入るとみんなが固まるように寝ていた。

家に俺以外の人が寝泊りするのはいつ以来だっけ？

ささやかな喜びが俺を満たしていく。

皮肉にもこの喜びを与えてくれたのは『奴ら』であって、この状況はとても幸せだった。

どっちのほうがいいのやら。

まあいいや。

俺はソファに転がりそう時間もさほどかからず意識を飛ばした。

目を覚ますとテーブルの上には「日本の朝ごはん」が並んでいた。
魚なんて・・・うちにあったっけ？

なんでもこの料理は飛驒が作ったらしい。

「……頂きまーす」「……」
味噌汁を一口。

「うまい、うますぎる!!!」

飛驒よ、お前は天才か!?

「飛驒お前すげーな!こんなうまいの久々に食ったぞ!」

「そ、そう?ありがとう」

飛驒は頬を赤らめて俯いた。

さて、みな一息ついたところで。

「今日はずいに移動を開始したいと思う。移送手段は車。最初に行くのは警察署。その後は高速を使ってノンストップで蓮田製薬を目指つもりなんだが……よってほしいところとかはあるか?」

「いや、俺は元々こっちにスカウトされたから両親は関東にいないし……」

と、対馬。

「アタシは……家族と連絡がついてもう避難したみたい」と、石田。それはよかった。

「私の両親はアメリカにいるの。だから心配ないわ」と、飛驒。

「ならとりあえず車で警察署へ、その後蓮田製薬に移動でいいな?」

「ちよつと、私は!?!」

おっと、佐伯先輩を忘れてた。

「どっか行きたいところあるの?」

「私は無いわ」

「じゃあでしゃばるなよ……」

「出発は正午。対馬と佐伯先輩は俺と車への荷物運びを手伝ってくれ。飛驒と石田はお昼用におにぎりでも作って」

「『『御意!』』」

俺達は庭に出て車に荷物を詰め始めた。
食べ物、飲み物、そして毛布など。

双眼鏡やバットはすぐ使えるように前に置いといた。

さて、あとは念のため燃料と・・・

ん？燃料!?

これは・・・

「ゴメン!二人で荷物詰めといて!俺ちょっと作らなきゃいけないものがあるから!」

「作らなきゃいけないもの?」

俺は家に入りビンを探した。

えーとビン、ビンと・・・

あつた、空き瓶だ!

数十分後・・・

「完成!」

「何作ったの?」

「これはだな・・・火炎瓶だ!」

そう、俺は火炎瓶を六本ほど作った!

これは大幅な戦力アップになるぞ!

「さすがミリタリーマニア・・・」

「似非、だけどな」

全員の準備が出来たところでみんなは車に乗り込んだ。
ちなみにうちの車は黒のアイシス。

「さて、と。機は熟した。皆、準備はいいか!?」

「『『もちろん!』』」

「いくぜ、チームハカ騒ぎTBS!」

「「「おっ！」「」」

佐伯先輩もこの空気になれたらしくのってくれるようになった。
うれしいねえ。

さて、俺達の快進撃の始まりだ！

「で、誰が運転するんだ？」

石田さん、運転席を見てください。

「え？俺だけど？」

その瞬間、皆の顔が凍りついた。

ついに銃器を手に入れたぞ！（前書き）

今回はやっと銃器の登場です。

自分なりに調べたのですが、間違ってる部分もあるかもしれません。
その場合はご指摘、お願いします。

ほかにもこれがあるといいよ、的な銃器も募集中です！

ついに銃器を手に入れたぞ！

俺達は警察署に車を走らせていた。

運転は俺。

なぜか皆シートベルトにしがみついて、固まったような表情でいる。何でだろうか。

一般道でたった80km/hしか出してないのに

「緩めろ！スピードを緩めろおおー！」

「うるせえなあ、対馬。観念しろよ」

警察署は大通り沿いにあるのでこのまま走っていれば着く。念のためカーナビを使ってはいたが。

「死ぬ！死ぬ！ゾンビ以外で死ぬ！」

「いやだあああ！！！！」

とまあ、みんな大騒ぎしていた。

「楽しい！ジェットコースターみたい！」

ただ一人飛騨を除いては。

「まもなく、目的地です。運転お疲れ様でした」

無機質な女の声がカーナビから聞こえてきたと思うと、数メートル先に警察署が見えてきた。

「みんな捕まってるよ！暴れるぜ」

俺はブレーキを踏みながらハンドルを左に切る。
すると車は左の車輪を浮かせた。
アクション映画も真つ青だぜ。

「浮いてる！浮いてるよアタシイイイイイイ！」

「石田！気は確かかあああああ！？」

ドスン！という音を立て車は警察署の前に止まった。

「みなさん到着です」

「お前の・・・運転は・・・どうにかならないのか・・・？」
と、対馬。

「これ以上よくはならないと思う」

それを聞いた全員は震え上がった。

警察署は・・・

壊滅状態だった。

まあ、予想はしてはいたが。

「どこも、か・・・」

警察署の前にはゴロゴロ死体が転がっていた。

中にはS A Tの死体もあった。

恐らく警察だけでは収集がつかなくなったのだろう。

ん？死体？

「なあ、対馬。何故ここの死体はゾンビにならない？」

「え？そういえばゾンビは一体もないな・・・。まさか！」

「多分ゾンビ以外の何かが警察署を襲ったんだろう」

死体の一つ一つを見ると銃で撃たれた後があった。

「傷跡も新しい……。襲撃されて間もないな……。」「俺達は転がっていた死体の目を閉じさせてからSATや警察が持っていた銃器を頂いた。」

「これは……。MP5Fか」
MP5F。警察が使っているサブマシンガンで小型なので取り回しがよい。

使用弾は9mm弾。

このMP5にはドットサイトがついていた。

警察署の前には銃器対策警備車が置いてあった。

警備車を開くと案の定……。銃器が並べられていた。

「お、USPもあんじゃない」

USP、このモデルは9mm弾を使い装弾数は1+15弾。

俺達はここで沢山の銃器と銃器対策警備車を拝借した。

「これで戦力大幅アップか……。ん？」

おかしい。

何故ここを襲った奴らはこの沢山の数の銃器を奪わなかった？
まさか。

「なあ……。ここを襲った奴らは俺達のことを知ってるんじゃないか？」

「何故そう思うんだ？」

「いや、ただの勘だ。気にしないでくれ」

とりあえず中に入って様子を見よう。

早速頂いたUSPを家から持ってきたレッグホルスター（似非、ミリタリーマニアだからね）にUSPをいれ、拝借したタクティカルベストに三つ、MP5の替えマガジンを7ついれ、無線機を装備した。

「石田と対馬はここに残って見張っててくれ。なにかあったらこの無線機を使って知らせてちょうだい」

無線機を対馬と石田に投げ渡した。

「基本的に銃はセーフティにして銃口を下に向ける。そしてトリガーには指を掛けるな。もしも何かあったらセミにして応戦しろ。

お前らもベストぐらいは着とけよ」

と、言い残して佐伯先輩と飛驒をつれて中に入った。

対馬と石田を二人きりにして残したのは俺のサービスだ。

何者かの手記

対馬と石田を残した（もちろんワケアリ）俺達三人は押収品倉庫を手分けして探していた。

さすがに地図や案内板にも書いてなく、俺が二階、佐伯先輩が三階、飛驒が四階を搜索。

ちなみに一階は全員で搜索した。

搜索している途中、俺は給湯室に立ち寄った。

「お、自販機があるじゃん」

俺は家から持ってきた財布から小銭を出して一息つく事にした。

ガタン、という自販機独特の音。

俺はコーラのふたを開けて少し飲んだ。

ふと、あるものに気がついた。

それは目の前に落ちていた。

何者かの「手記」だった。

パラパラと捲ってみたが今までの事件の様子などを書き残していたらしい。

何を思い立ったか俺は昨日の日付を探した。

7月17日

全く、おかしいことも起きるもんだ。

まさかゾンビがでてくるなんて。

最初こそは驚いたが慣れというのは恐いな。

俺達警察は署に立てこもり、避難民を受け入れて救助ヘリの来る場所に連れて行くということになった。
SATも出動し、ゾンビは抑えられているので、無事に逃げ切れるだろう。

7月18日

ああ、俺はもう長くは無いかもしれない。

まさか、ゾンビではなく人に撃たれるだなんて。

彼らは早朝に来た。

要求はこうだった。

「ここに北村敦はいるか。出さないと全員殺す」

一応避難民を受け入れる時氏名を記録させているが、北村敦なんて者はいない。

そのことを伝えると彼らは無差別に発砲を始めた。

俺は肩と腹を撃ち抜かれた。

出血が止まらない。

意識は遠くなっていく。

避難民は彼らの注意を警察に向けさせて脱出させた。

そしていまに至るといわけた。

北村敦。

彼が何を握っているのかは知らないが、これだけは分かる。

彼らは北村敦を狙っている。

逃げろ。

危険だ。

俺は手記をパタンと閉じた。

何故だ。

何故俺が狙われている？
俺が鍵を握っている？
なんのことだ？

考えれば考えるほど分からなくなっていく。

これはまた別の機会に考えよう。
俺はバツクに手記をしまい、皆の分のジューズを買った。

俺が給湯室を出たそのとき、通信が入った。

「あーもしもし？押収品倉庫は見つかった？」

石田の声だ。

「いや、俺は見つけてない」

「私も見つけてないよ」

「私も」

そうか、結局見つからなかったのか。

「あちゃー、そりゃ残念。でも時間切れだな。急いできてくれ！ゾンビがお出ましたぞ！」

死体の臭いを嗅ぎ付けてきやがったのか。

「了解！今行く！」

俺は階段を駆け下り、石田と対馬の元へ向かった。

「ただいま！ゾンビの数はどれくらい？」
対馬はあごを杓った。

うわ・・・

ゾンビの数は百体は超えている。

「どんどん増えやがるー！」

石田はそういいながらMP5を乱射していた。

・・・こいつなれてるな。

「俺も参戦だ！」

俺もMP5をセーフティからセミにして、ドットサイトを覗く。頭にサイトが重なったらトリガーを引く。パンツという音と共に頭が砕け散った。

そのうち、全員揃い初め何か策を練らないとマズイ、と焦り始めた。今あるのは、MP5と、USPと、銃器対策警備車と、アイシス、あとスタングレネード・・・

ん？スタングレネード？

これ使えるんじゃない？

「皆、車に乗りこめ！飛騨は警備車の助手席に乗れ！」

「敦は！？」

「乗る！」

皆が俺の伝えた通り、車に乗り込んだ。

俺も警備車の運転席に乗り込み窓を開ける。

そして無線機に怒鳴る。

「みんな！目つぶって、耳ふさげ！」

そして窓からスタングレネードを投げた。

「グレネエエエエド！！！！！」

放り投げた後、俺も目を瞑り耳を塞いだ。

目を瞑っても分かるぐらいの光と音がスタングレネードから放たれた。

恐る恐る目を開けると、ゾンビたちはそこらじゅうで倒れていた。

恐らく音によって方向感覚をなくしたのだろう。

「よし脱出だ！俺について来い！」

俺はアクセルを全開ににしてゾンビたちを轢きながら警察署を後にした。

後ろからはアイシスがついてきている。

大成功だ。

「チムハカ騒ぎ TBS、脱出大成功！」

その瞬間、無線機から歓声が聞こえた。

何者かの手記（後書き）

敦を追い掛け回してるのは一体誰？

謎は深まるばかり。

次回もお楽しみに！

アイスを愛す(しょーもない)(前書き)

お気に入り登録がまた一人増えました！

ありがとうございます！

これからもよろしくお願いします。

アイスを愛す（しょーもない）

警察署から逃げ出した俺達の興奮はなかなか冷めなかった。

無線機から歓声は絶えない。

助手席に座る飛驒も興奮して俺を揺すつてくる。

そうなるかと車が蛇行運転になるのは当たり前で車を何度か縁石にかすめた。

途中にあったコンビニで一休みすることにした。

俺は面倒くさいから車を駐車場のど真ん中に置いた。

運転技術が無かっただけです。

しかし後ろのアイシスはちゃんと駐車した。

・・・なかなかうまいじゃないか。

俺は車から降りるとアイシスに乗車していた奴らに聞いた。

「誰が運転してたんだ？なかなかうまいじゃないか」

「私よ」

以外にも手を上げたのは佐伯先輩だった。

「あんた、何でそんなにうまいんだ？」

「庭でお父様に習ったことがあったから」

はい、お金持ち発言キター！。

「運転できるほどの大きさって・・・どんだけ広い庭だよ!？」

「学校の校庭二つ分？」

聞いた俺がバカでした。

「そっぴやアソタの家って関東内だろ。心配じゃないのか？」

「心配ないわ」

即答ですか、そうですか。

「うちはね、代々狩猟好きな家族なの。だから散弾銃ぐらいは沢山あるわ。それに今は電気が通ってるでしょ。だからセキリュティがかかっているから鼠一匹も入れないわ」

「どっだけ自信あるんだ。セキリュティに。」

「今サラツと言ったがゾンビが発生してからも電氣は断たれなかった。関東内の発電所こそは止まっていたが、それ以外のところはもちろん止まっていない。」

「なので電氣は供給し続けていたのだ。」

「さて、中に入って物資を拝借させてもらおうぜ」
俺は金属バットとUSPをもって中に入った。

「お邪魔します」

中はクーラーが効いていた。

俺達は食料などの物資の拝借を始めた。

「えーと、カロリーメイト、パン、運転用のガムも買ったほうがいいな・・・」

ひとまず調達を終えた俺は外に出て車に寄りかかった。
そしてバックから警察署で拾った手記を開く。

「一体俺を狙っている奴とは誰なんだろうか？」

「理由は？」

「心当たりもない。」

「うーむ・・・」

「手記をパターンと閉じる。」

「今じゃ分からないことが多すぎる。」

「どうしたの、唸っちゃって」

「飛騨が隣にやってきた。」

「いや、ただの考え事だよ」

「もしかしたら人違いってこともある。」

「俺は関係ないことを願おう。」

「おーい、いいもん見つけたぞー」

「石田がレジ袋いっぱい何かを入れて持ってきた。」

「ほれ、敦」

「石田が俺に向かって投げ渡してきた。」

「冷たっ！」

「ついつい落としかけたのはアイスだった。」

「ほら、陽子も」

「ありがとう」

佐伯先輩と対馬が戻ってきたところで小休憩。

「あ、そーだ。警察署でコーラ買ってきたんだ」

俺はバックから人数分のコーラを取り出し、皆に渡した。

「お、用意がいいじゃん」

プシュッと音を立てながら対馬はコーラのふたを開けた。

その時。

「うわっ！」

コーラが噴出して、対馬は頭から被ってしまった。

バックに入れた状態で走ったからな。

「あはははは！」

「笑うなよ！」

対馬は顔を真っ赤にして怒った。

少しだけの幸福の時間。

脱出したらこんな時間を大切にして生きていきたいと思った。

それと同時に、ゾンビになるとその大切さを忘れてしまうのかと思うと悲しく思えた。

絶対に生き残る。

生きる気力が沸いてきた。

「さて、今から脱出ルートの確認をするぞ。なるべく戦闘は避けたいからな。人気の少ないであろうこの峠を越えていく」

俺は地図上の峠を指差す。

「ああ、心霊スポットで有名なあの峠ね」
そう。

ここは心霊スポットと騒がれて普段から人が寄り付かない。

だからゾンビは少ないと思ったのだ。

俺は幽霊なんてオカルトは信じていないのでなんの不安も感じてない。

・・・まあゾンビが出た時点でオカルトの否定もできないのだが。

「じゃあ、編成を確認するぞー」

警備車には、佐伯先輩、飛驒
アイシスには、俺、対馬、石田

運転の難しい警備車は慣れている佐伯先輩に任せようという作戦だ。

アイシスにもいくつかの銃器を詰め込み出発の準備をした。

「さて、準備は整った。みなさん、トイレには行きましたかー？」

「「「「「ハイ！」「」「」」

「心の準備はいいですかー？」

「「「「「ハイ！」「」「」」

「じゃあいくぜ！TBS！」

チームハカ騒ぎ

「「「「「おう！」「」「」」

俺達の脱出作戦は第二段階に移行した。

アイスを愛す(しょーもない)(後書き)

次回は番外編です！

楽しみに待っていてください！

〈番外編〉 幽霊峠を越えて(前書き)

今回は番外編です！

心して(?) お読みください！

〈番外編〉 幽霊峠を越えて

俺達はコンビニで一夜を明けて（もちろんシフト制で見張りをした）朝一で例の峠へ向かった。

「嫌な場所だな、ここは……」

「なんか、でそうだね……」

峠の入り口は森で囲まれていてカーナビ無しでは恐らくたどり着けなかっただろう。

異様な雰囲気醸し出す峠はいかにも「でますよ」と言っているようだった。

俺は無線機に話しかける。

「さて、入るか。佐伯先輩。先導、お願いします」

「了解。ちゃんとしてきなさいよ」

峠の道はくねりにくねって、その上で霧がかかっていた。

気を抜いてしまえば崖に落ちてしまいそうである。

そんなもっていかにも『ヤヴァイ』雰囲気はいつまでも消えることはない。

車内にもそんな空気が流れていた。

……わけがない。

「しりとりー！」

「りんごー！」

「極寒！」

「「はい、ンがついたー！」」

俺、対馬、石田トリオは、歌を歌う（石田のソロリサイタルになったのは言うまでもない）、連想ゲーム、笑い話、そして今のしりとりに至る。

「いやー、でるとは聞いていたけど何もでないなー」

「結局は雰囲気だけだよ。ほら、カーナビもちゃんと方向示してるし。安心、安心」

「あー、ガムとって。そうそうその黒いやつ」

俺達は順調に峠を越えていた。

丁度中腹あたりに差し掛かった時だった。

「あー、霧が濃くなってきたな・・・」

霧が濃くなってきてライトで照らしても半径1mぐらいしか見えなくなってきた。

そのうち前の二人が乗っている警備車も見えなくなってくる。

俺は不安になって無線機に話しかける。

「あー、あー、聞こえますかー。応答してくださいーい」
「ザーツ・・・」

返事は聞こえてこない。

「離れちゃったんかな？でもカーナビはこっちを指してるし・・・大丈夫だろ。それにケータイもあるし」

対馬がケータイを開いた。

「今は圏外だけどね」

走ってるうちに分かれ道に差し掛かった。

ポーン

左です。

「左つと」

俺はハンドルを左に切る。

「なあ、なんか道荒くねえか？」

石田の言う通りだ。

さっきから車内はガタガタと音を立てながら走行していた。

「でも、カーナビはこっち指してるから」

走ること数分。

「お、霧が晴れてきた」

完全に霧が晴れるとそこには・・・

古びたトンネルがあった。

「ここ通るのかあ。なんかやだな」

そのトンネルはさっき感じた『ヤヴァイ』雰囲気醸し出す元凶
だったらしい。

「これを通り抜けた飛驒と佐伯先輩・・・恐るべし」

全くだ。

「でもこれを抜けないと超えられないから・・・行くか」
俺はアクセルを踏んだ。

ポーン

しばらくみちなりです。

「なあ、このトンネル以上に長くないか？」
確かに。

このトンネルに入ってからかれこれ十分を過ぎていた。

「アクアラインかよ、ここは」

しかも雨も降り始めたらしい。
かなり強い雨だ。
ザーツと車体に降り続いた。

「お、出口が見えてきたぞ！」
やっと出口が見えてきて俺はアクセルを強く踏み込んだ。

しかし、出口に出た瞬間俺はブレーキを踏み込んだ。

「ッ!？」

「なんだこれは!？」

出口の先は崖だった。

俺達は車から出て、雨に打ち付けられながら崖を見下ろす。

すると崖の下にはゾンビがうじゃうじゃいた。

「……これからここはゾンビ峠とよぼう」
俺はそうつぶやいた。

「さて、戻ろう。きっとあの分かれ道で間違えたんだ」
俺達は車内へ戻る。
その時。

ポーン

シネバヨカッタノニ・・・

「「「え」「」」

えーと。

例のアレですか？

「「「うぎゃああああああ @ !!!!!!!?????」「」」

俺はギアをバックにして思いっきりアクセルを踏み込んだ。
しかも俺は後ろを見ないで真っ直ぐ進み続けた。

人間追い詰められた時、何でも出来るもんだな。

ははは。

「やばいやばいやばいやばい……!……!……!」

〈番外編〉 幽霊峠を越えて（後書き）

まあ、色々と有名な話を繋げてみましたWW
カーナビの話、地味に怖いですよねWW
あ、ちなみにカーナビはまた出演予定です。
結構重要な役割で。

感想、評価、お待ちしております。

千田国山病院、防衛作戦（前書き）

昨日は用事があって更新できませんでした。
すみません。

千田国山病院、防衛作戦

俺達はあの幽霊峠（もとい、ゾンビ峠）を超えて、蓮田製薬に向
う。

俺はアイシスを運転していたがあの『恐怖』から逃れるために無茶
苦茶な運転をしていた。

「・・・このカーナビ壊れてんのかな？」

「そういうことにしておこう」

俺達がある病院の前を差し掛かってきたところで、前の警備車が
止まった。

「どうした？なんかあったのか？」

俺は無線機に話しかける。

「あその病院、ゾンビたちがうじゃうじゃいるよ」

そう言われて俺達が顔を右に向けるとゾンビたちが数百体はいた。

「俺達に気づいてないうちにとんずらさせてもらおうぜ」

「そうね」

俺達は何も気にせずに通り過ぎようとした。

通り過ぎようとした。

「なあ、あれ生存者じゃないか？」

石田がそう呟いた。

「え？」

俺がもう一度よく見ると確かに猟銃を構えてゾンビに対抗している
生存者がいた。

俺はブレーキを踏み無線機に怒鳴りつける。

「おい！あの病院には生存者がいるぞ！」

「嘘！？」

佐伯先輩と飛驒も気づいたらしく窓を開け、身乗り出し凝視した。

「ほんとだわ・・・どうするの？」

「決まってるだろ・・・助ける！俺について来い！」

俺はハンドルを右に切りアクセルをいつでも踏み込めるように準備して窓を開けた。

「その人達伏せてくださーい！」

俺はMP5をひざの上に乗せいつでも戦えるようにした。

「お前らも準備しろよ」

「「御意！」」

俺は窓からスタングレネードを投げた。

「みんな！目を瞑れ！」

俺も目を瞑りながら耳を塞いだ。

スタングレネードは数秒後、目を閉じても伝わるほどの光を放出した。

それを合図に俺は車のアクセルを思いつきり踏み込んだ。

「捕まつとけ！暴れるぜ！」

見るとゾンビは大音量のせいで方向感覚をなくしたようでバタバタと転んでいた。

「うおらああああ！」

俺はゾンビを何体も轢いて生存者の前に車を止め車から飛び降りた。

「みんな！仕事だぜ！」

「「おうよ！」」

石田と対馬が元気よく返事し車から飛び降りるなり戦闘を開始した。飛驒と佐伯は生存者の病院への避難を始めた。

俺は空気を肺まで吸い込んで思いつきり叫ぶ。

「いくぜ！」

自分に気合を入れたところで俺も戦闘を開始した。

ゾンビたちはやっと方向感覚を取り戻したのかユラユラと立ち上がってこっちに迫ってきた。

俺は近い奴から頭に銃弾を打ち込んでいく。

「お前達、慣れてるじゃないか！」

ガハハハ、と豪快な笑い声を上げながら猟銃で参戦するこつい体格をした猟師さんに俺は尋ねた。

「何時からこいつらは湧いてきたんですか!？」

「いや、ほんとさつきだな。なんの前触れも無く、百体近い『奴ら』がここに集まってきたんだ」

「そうですか」

俺は話しながらもセミオートでゾンビの頭を打ち抜いていった。

途中、MP5の弾が尽きマグチェンジするのが面倒くさいのでUSPをホルスターから抜いた。

「こんなもん、か」

三人+猟師さんの奮闘あつて俺達は百体近くのゾンビの撃退に成功した。

「まあ、中に入れよ」

俺達は病院の中に入り、院長の歓迎を受けた。

「いやあ、ありがとう！本当に感謝するよ！」

院長に握手を求められた俺達は順番に自己紹介をした。

「北村敦です。高校一年生です。一応このグループのリーダーみたいなことをやってます」

「対馬大樹です。同じく高校一年生です」

「アタシは石田由美ッス。アタシも同じくッス」

「私は飛騨陽子です。彼らと同じ一年生です」

「佐伯伊那です」

院長が佐伯先輩を見るなり、

「おやおや、お譲ちゃんはこの人たちに助けてもらったのかな？」

「私は高校三年生です！」

「ははは！こりゃ失礼。私は天美良哉。あまみりょうやこここの千田国山病院の院長です」

そして間を空けて言った。

「私達はあなた達を歓迎します」

恐怖の予感（前書き）

ああ、なんか最近グダグダになってきてる・・・

恐怖の予感

早朝三時頃。

俺と対馬は病院の屋上で見張りをしていた。

俺たち五人はここで一夜を明けることにしたのだ。

「眠い……」

「俺も一緒だ。我慢しろ」

何故俺達が見張りをしているのかというと、この病院のルールに従うことにしたからだ。

あの院長、あえて俺達を夜中のシフトにまわしやがったな。

「ここの人達はいいい人ばかりだよな」

「ああ」

戦いを終えた後、石田は性格からか、佐伯は身長からか、子供達にすぐ慕われて一緒に遊んでいた。

飛驒は院長と話したりしていたらしい。

俺と対馬はというとあの猟師のおつちゃんとロビーで話していた。

「さつきは助かった。ワシは北条隆秀（ほつじょうたかひで）。よろしくな」

「僕は北村敦です」

「僕は対馬大樹です」

「お前らは高校生か？」

「はい、高校一年です」

おっちゃんは・・・秀隆さんは上を向いて「そうか」と呟いたあと、ハアというため息をついた。

「お前らを見ているとワシの息子を思い出すよ」

「息子さんがいらっしやるんですか？」

「ああ、お前らと同じ歳だよ」

「そう、ですか・・・」

重い沈黙。

「息子はな、離婚した妻について行ったんだ。その後は行方知らず。関東外に住んでいればいいんだが・・・」

「大丈夫ですよ」

対馬が答えた。

「あなたの息子さんならきつと生きてます。もし、関東内にいてもあなたみたいにきつと必死に戦っていますよ」

「そう、だな・・・」

隆秀さんは表情を緩める。

「すまねえな！なんか辛気臭い雰囲気になっちまった！」

そういつて相変わらずのガハハハ！という豪快な笑い声で笑った後、俺達にいろんなことをおもしろおかしく話してくれた。

「あのおっちゃん、どんなことがあっても生き残るだろうな」
「ああ、しぶとそうだもんな」

ハハハと笑った後、双眼鏡を覗く。

近くのスーパー、異常なし。

その中学校、異常なし。

異常なほどにでかい公園、異常なし。

病院の近くにある大通り、異常・・・

「ん？」

「どうした？」

「おい対馬、あその大通り見てみる」

対馬が双眼鏡を覗く。

「何だアレは!？」

「真っ直ぐこっちに近づいてきやがる」

大通りにいるのは・・・

「怪物だろ、あれ」

身長2mは超えている怪物だった。

俺は無線機に怒鳴りつける。

「おい！誰か！起きてるか！？」

「う……ん、起きてるよ」

いつも通りのおっとりした飛騨の声だ。

「いいか？皆を起こしいつでも避難できる用意をするように言え。
緊急事態だ」

「え！？うん、わかった！」

見ると病室に光がつきはじめ、慌しい声も聞こえ始めた。

「対馬も準備しとけ」

「わかってるよ」

対馬がそれだけ言つと、走って屋上から出て行った。

「おれ、どうしてか」

恐怖の予感（後書き）

感想、お待ちしてまーす！

大きさと、強さは比例しない。

場所は屋上。

TBSと猟師のおっちゃんと院長が集まっていた。

「やべえことになっちまったな・・・」

石田が双眼鏡を覗きながら呟いた。

「いや、大丈夫だろ」

俺が腕組しながらそう言うと全員がバツと振り返る。

「何か作戦でもあるのか!？」

「いや、ないよ。って石田、その握った拳をほどけ」

「お前この状況でよくふざけた事が言えるな!？」

「いやいやいや!ふざけてないよ!」

実際俺はふざけてない。

恐るべし。

「で、編成というか作戦なんだけど・・・」

「作戦あつたの!？」

「いや、作戦というほど立派なものではないんだケドネ」

一時間後・・・

『そいつ』はやってきた。

病院の駐車場に。

駐車場にはバリケードらしきものが三つ。

その裏にはTBSメンバーが二人ずつ、真ん中に猟師さんと俺が待機していた。

ノシノシとデカブーツがバリケードの真ん中に歩み寄り『挟み撃ち』状態になる。

「あー、そろそろいい？フラッシュグレネード投げるからねー」

と、思った？

「想定済みじゃボケエエエエエエエエ！！！！」

俺たちは一斉に銃弾をギガンテスに撃ち込む。

「これぞ！『三方向から撃ち込めば迷って攻撃できないんじゃないかね？』
作戦じゃああああ！！！！」

まあ、ようするにゾンビ程度の低脳なら三方向から撃ち込めば誰
を攻撃するか迷って拳銃の果て勝手に力尽きんじゃないの？という
作戦。

まあ、恐ろしい。

「ヒヤハハハハハハハハ！！どうだ！俺の作戦はよおオオオオオオオオ
オオ！！！！？」

完全に他から見れば変人・・・も通り越した野蛮人だったろう。

「落ち着け！落ち着いとけ敦！」

この状況で落ち着けと？

だって完全にこっちが押してんじゃない？
興奮するって！！

ギガンテスは誰を攻撃すればいいか迷ってたし、それなりにも効いていたみたいなので作戦は成功。

の、はずだった。

カチツカチツ

「あ」

弾切れです。

本当にありがとございました。

ってふざけてる場合じゃねえ！！

ギガンテスは俺の攻撃が緩んだとたんにこっちに向きなおい、馬鹿でかい右腕を振りかぶる。

「やべっ……！！」

俺は右に飛び退いておっちゃんを左に飛び退いた。

ドカアアアアン！という音とともにさっき我々がいたところに来てクレーター。

こいつ・・・化け物だ！（ゾンビです）

しかもギガンテス、俺に狙いを絞ったらしくしつこく攻撃してくる。

「おい！ギガンテス！俺はリロード中だ！攻撃してくんな！」

「ギガンテスつてドクエか！？」

あ、そっか。

どこか似てる名前だなと思ったらドクエか。

なんとかリロードに成功した俺はギガンテスに銃弾を浴びせまくった。

しかしこのままだと玉が全部尽きてしまう。

ちょっとあいつの特徴をまとめてみよう。

- 1、身長は2m以上 でけえな・・・
- 2、馬鹿力を持つてる 迂闊に近づいたらTHE・ENDか・・・

3、意外と足速い 陸上部からスカウト来るんじゃないかね？

4、名前はギガンテス 関係ないよね！？今関係ないよね！？

5、視覚を頼りにする ん？じゃあ目潰せばいいんじゃないかね？

結論

目え潰せば俺らの勝ち。

でもでもでも！目潰すにしても俺達は銃で目潰せるほどの腕は持っていない。

近づいて目を潰すにしてもある程度の距離に入った瞬間あの太い腕で一発KOだろうな。

なにか安全で、的確に目を潰せるものはないか・・・？
とりあえず今持っているものを頭の中でリストアップしてみよう。

M P 5 動きながら狙い撃ちできるほどの腕は持っていない。

U S P M P 5と同じ。

無線機 叩けと！？これでギガンテスを叩けと！？

フラッシュグレネード 一時的に止められるだけだしなあ。

コーラ これあげてギガンテスと仲良くする・・・？

火炎瓶 ん？これで体ごと燃やせば・・・

結論

火炎瓶で体ごと燃やして目も潰す。

「おい、みんな！一ツいい案が浮かんだ！援護を頼む！」

「『御意！』」

俺は火炎瓶を置いておいたアイシスに駆け出し、火炎瓶とライターを取り出した。

「ごめんよ・・・君の事、忘れてたよ・・・

俺はギガンテスに向きなおす。

そして、火炎瓶のふたに詰まっているぼろきれに火をつけある程度ギガンテスに近き思いつきり火炎瓶を投げる。

「俺の！愛とか、真心とか、燃料とかを詰め込んだ火炎瓶を喰らいやがれ！！」

火炎瓶は大きな弧を描きギガンテスに一直線。

あ、俺は中学生時代何を間違えたか野球部に入ってしまった遠投は得意。

そして、抹消したい記憶の一つ。

火炎瓶はと言うと・・・

ギガントスの胸のところで碎けてそこから火が腕、足、顔へと回っていく。

ギガントスはその火を降り消したいのか体をブンブンと降って暴れていた。

最後の足掻きだろう。

でも、最後の足掻きってコワイネ。

ギガンテスは腕をブンブン振って暴れていた。

だんだん俺に近づきながら・・・

「え？」

その炎を纏った腕は俺に直撃し、石田のとは比べ物にならないほど吹っ飛んで、病院の駐車場を区切るフェンスに当たる。

「グッ！？ハア！！！？？」

どうやら頭をつつたらしい。

「敦！あ・・・し！あ・・・」

俺の意識はそのままブラックアウトした。

大きさと、強さは比例しない。(後書き)

なんかグダグダになってしまいましたorz
すいません。

次はがんばります！

男はいつの時代も地獄を見るものだ

俺が目を開くとそこは真っ白な天井だった。

今寝ているということはすぐわかる。

ああ、そうか。

確か俺、ギガンテスと戦って勝ったんだっけ。
で、その後油断して殴られた、と。

「お、敦。起きたか」

ベッドの隣では対馬が椅子に腰掛けていた。

「あれ・・・今何時？」

「3時。ギガンテスと戦った次の日のね」

俺、一日も寝てたのか。
って、そういえば！

「ギガンテスは！？ギガンテスはどうなった！？」

「ん？ああ、あの後脳も焼け落ちたのかそのまま死んだよ」

「そうか・・・」

「あーもしもし？みんな、敦が目覚ましたよー。集合」
対馬が無線機に話しかけてサラリと召集を呼びかけた。

「お！北村君起きましたか」

院長が最初にやってきた。

「君よくあんなの喰らって生きてたね。つーかなんで死なないの？」

医者が言うか。普通。

「まあ、いつもことですからね。あんなんじゃ死にませんよ」

「おーい、敦！心配したぞ！」

ほら、来ましたよ。元凶が。

「やあ、石田。君のおかげでどうやら耐性がついたようだ」

「悪いことばかりじゃないだろ。アタシの暴力は」

暴力と認めてたんですね。

「あ、敦。おはよう。よく寝てたね？」

飛驒ともう一個ちっちゃいのが来た。

「そこのお譲ちゃん是谁かな？」

「佐伯よ！分かってて言ってるでしょ！」

「そんな決め付けるなよ。どうやら殴られたショックで少し記憶が跳んだようだ」

もちろん嘘です。

「さて、全員揃ったから伝えたいことがある」
院長が切り出した。

「北村君。君は軽い脳震盪と、左足首を少し捻っただけ。もう、回復はしているが念のため一週間は安静にしててくれ」
「了解です」

「で、君たちは後一週間はここを出られないことになったので、ゆっくりしていつてくれ」

「……ありがとうございます」「」「」

「さて、さすがに一人部屋は用意できないので、相部屋にさせてもらった」

そんな一人部屋なんて。恐縮です。

「さっそく部屋のメンバーを紹介しよう。向かいのベッドに寝ているのはアベさん」

「やらないか？」

「結構です。しかしこっちの対馬は男好きなんで好きにしてください」
「い」

「え！？おい！敦！」

「ウホッ、いい男」

「え、ちょ、ま！」

「やらなくいか」

「ギヤアアアアアアアア！！！！！！」

あ、対馬の奴逃げおった。

「いいのかい？ホイホイ逃げちゃって」

あ、アベさんも行った。

「アーツ！！！！」

対馬よ。永遠になれ・・・。

「アベさんは本当に病人ですか？」
「ええ、末期ガンです」

その瞬間、空気が凍った。

「嘘です」

「・・・嘘かよ!?」「・・・」

「本当は右腕を骨折しました。彼、自動車整備士だったんですけど、
そんなとき怪我したみたいですね」

「隣の方の美人は倉田さん」

確かに黒髪をストレートに伸ばして、顔立ちも素敵な倉田さん。
イカン掘れそうだ。間違えた、惚れそうだ。

楽園（エデン）への誘い

なんとか自分の首を守った俺と、自分の貞操を守った対馬は息切れ切れながらもロビーに皆で集まっていた。

「部屋に戻りたくない倉田さん怖い部屋戻りたくない倉田さん怖い部屋戻りたくない倉田さん怖い・・・」

「男子トイレ行きたくないアベさん怖い男子トイレ行きたくないアベさん怖い男子トイレ行きたくない・・・」

「「「・・・」」」

「敦の部屋で会議しようぜ？」

「「それだけはご勘弁を！」」

軽くノイローゼです。

まさかゾンビ以外で死が近づくとは思わなかった。

金の塔と三途のriverが見えてしまったよ。

「俺は正常な男に戻れなくなるところだったよ・・・」

「さて、今から一週間暇になるので物資の収集をしたいと思うんだけど。行きたい奴は両手を上げる!」

「はい!」

「対馬はいいけど敦は怪我人なので却下」

「やった!」

対馬め、俺ももう倉田さんには会いたくねえよ……。

対馬が帰ってきたらまたアベさんを仕向けるか。

「私は敦も心配だし、ここに残るよ」

と、先の見えない闇に一筋の光を注いでくれたのは飛驒。

「じゃあ、物資回収班は、私、対馬、佐伯先輩、と。敦と陽子は何か持ってきて欲しい物はあるか?」

「私は特に無いわ」

「俺は……あ、じゃあナイフをお願い。できるだけ刃渡りが大きいのを」

「了解。じゃあ行つて来るぜ」

物資回収班はアイシスに乗り、町へと駆り出した。前もって院長にここ周辺の地図を借りたようだ。

「……さて、みんな行つちやっただし敦は部屋に戻って休もうか」

「いやいやいやいやいや!!!!!!!!」

休むどころか二度と目を開けられない体になる。

「大丈夫。私も一緒にいるよ」

本当に大丈夫だろうか・・・

「あら北村君。さっきはごめんなさいね。ついカッとしちゃって。だから私を怒らせないでね？」

善処します。

「北村君。やらないか？」

「お断りします。俺、ノンケなんで」

「俺はノンケでも喰っちまう男なんだぜ？」

「やめてください！あ、でもさっき対馬が天国を見たので今度は樂園デソに行きたいと言ってましたよ」

「さっきの男か・・・ウホッ」

よかつたじゃないか、対馬。

お前、いい男に認定されたぞ。

その後、俺、飛驒、倉田さん、アベさんは四人で色んな事をして（決して、やましいことじゃない）遊ぶことになった。

大富豪

「8切り！」

「Jバツク！」

「ロツク！」

「ウホツ、革命だぜ」

「何！？」「」

優勝、アベさん。

アベさんは異常な強さを見せた。

「それ以外にも色々と見せてあげられるぜ？」

遠慮します。

第二回戦

花札DEトーナメント

「猪鹿蝶ッ！」

「花見酒！」

「ウホツ、雨四光」

「五光です」

「参りました」

優勝、飛驒。

さすがにこの手の遊びは得意か。

第三回戦

将棋DEトーナメント

「王手！」

「ウホッ、飛車成り」

「秘儀！穴熊困い！！」

「詰みですけどね」

「調子乗ってすいませんでした」

優勝、倉田さん。

冷静な分析によりいとも簡単に勝利をもぎ取った。

第四回戦

そう言って石田が出してきたのは・・・

「日本刀？」

「そう、日本刀。さっき言ったミリタリーショップに置いてあった。その店長、色々な国の武器を集めてたらしいぜ」

ほう日本刀か。

「でもさ、日本刀ってそれなりに技術がないと使えないぜ？」

「私をなめないで欲しいわね」

そう言って石田の後ろから出てきたのは佐伯先輩（笑）。

「私の家では色んな武術を習うことになってるの。もちろん日本刀だっけ習ったわ」

ハイハイお金持ち発言ドモー。

「あれ？対馬は？」

「あそこで丸くなってるわ」

「アベさん怖いアベさん怖いアベさん怖いアベさん怖いアベさん怖いアベさん怖いアベさん怖い」

対馬は床にへばりついていた。

俺は静かに無線機の電源を入れる。

「あー？アベさん？対馬帰ってきたよ？」

「敦！？お前何を・・・！」

ガバツ、と起き上がる対馬。
ほお、すばらしい反射神経。
さすがはハンドボール部レギュラー。

「君はいい友人だったよ・・・」
「そんなこと言わずに俺を」
「やらないか」

アベさん来ました。
にしても早すぎませんか？

ここは一階のロビーで、俺たちの部屋は四階なんだが。

「嫌アアアアアアアア！！！！」
「フンッ、フンッ、ますますいい男」

お、あいつ逃げおつたぞ。
でもあっちって確かトイレがあったような気が・・・

「やらなくいか〜」
「アーツ！！」

対馬の悲鳴
楽園の鐘は夜の八時ごろまで止まなっかつたそうな。

めでたしめでたし。

楽園（エデン）への誘い（後書き）

先日、家でテレビを見ていると青森に大雨警報が出ていたので青森に引越した友達と連絡を取ってみました。

僕 「そっち大雨警報出てるよ」

友人 「え？マジで？今犬の散歩してるんだけど、ってかなり降ってきた！」

僕 「そのまま風邪でも引くんだな」

友人 「ならば雨乞いでもしてそっちにも雨を降らせてやろう」

僕 「じゃあ、俺は丑三つ時に杉の木に藁人形を五寸釘で打ち付けてやろう」

友人 「え！？呪い！？」

僕 「せいぜい少ない人生を楽しむんだな」

友人 「・・・死んだら化けてやる」

僕 「じゃあ将来は御祓い師にでもなるのかな」

友人 「ふざけるなああああ！！！！」

僕 「ハハハｗｗｗ」

今でもいい友人ですｗｗ

多分親友といっても過言ではないと。

敦、確保。(前書き)

日にちを空けると文章が浮かんできませんね・・・。

敦、確保。

「新しい快感に目覚めるところだった・・・」

対馬はその後、俺の部屋にフラフラとやってきて、倒れるように寝込んだ。

そして朝。開口一番がこれだ。

「そのまま楽園行けばいいのに」

「行けるか！お前は誰の味方だ！」

「強いて言うならば・・・アベさん？」

「裏切られた！？親友と思っていた奴に裏切られた!？」

「じゃあ、敦君。君も俺と、やらないか？」

「お断りします」

やはり対馬をアベさんに仕向けるのは楽しい。

「おーい！敦！遊びに来たぞー！」

女子三人組が俺の部屋に入ってきた。

基本的に俺の部屋はみんなの溜り場になっていた。

「騒がしいですね」

「すみませんでした」

倉田さん、微笑みながら脅さないでください。

しかも目が笑ってません。
怖いです。

「いえ、騒がしいのはあなた達ではなくて、外が妙に騒がしいんですよ」

「え？」

言われてみれば確かに外が騒がしい。

「ちょっと、屋上に行ってみるか」

「なんだあいつらは……」

「生存者、だよな？」

「そりゃそうだろ。だってあれ……」

軍用車が三台ほど病院の前に止まっており、中から出てきたのはどこの軍だよ、と感じの方々でした。

「救助かな？」

そつか、救助か。そうだな。ここには病人とかけが人とかがいるから、救助が来たんだな。これで説明がつく。うん。納得、納得。

車から降りてきたリーダーらしきおっさんが拡声器を取り出した。

これから演説でもすんのか？

「ここに北村敦はいるな！？三十分以内に出て来い！さもなければ強行突入する！」

「え？俺？」

屋上にいた全員が俺の顔を覗き込んできた。

俺達は病院の会議室で院長、TBS、猟師のおっちゃんまで会議することになった。

「あいつらが警察署を襲った奴らだな」

「なんで敦なんかを・・・」

「さて・・・これからどうする？」

「はい」

「はい、石田さん」

「戦う！」

「却下」

「なんでだよ！」

「あいつらは訓練された兵士達だろう。もし、そうじゃなかったとしても完全に俺達の装備を遥かに上回っているし、すでに病院も囲まれた」

「じゃあどうしろと！？このまま強行突破を許すつてのよ！？」

「そ、それは・・・」

重い沈黙。

俺達、いや俺の仲間が逃げ切るためには一つしか方法がないのだが、それをみんなが許してくれるだろうか……。

「俺が、行く」

「だめだよ！」

止めてくれたのは飛驒。

涙ぐみながら俺の両肩を掴んでくる。

「一人でも！一人でも欠けたら私達は……」

最後のほうは声が小さくなっていつて聞こえなかった。

「俺は死ぬつもりは無い。それに……」

そうさ。みんながきつと。

「お前らが助けに来るのを待ってるから」

俺達TBS、院長、猟師のおっちゃん、アベさんは病院の玄関にいた。

「北村君、ずるいじゃないか。あんなにいい男達と……私が代わりに行く」

「結構です」

アベさん、その言葉は俺を思ってますか？それとも自分のためですか？

「敦・・・すぐに助けるからな」

「ああ、待つてるぜ。対馬」

俺は玄関から両手を挙げて出た。

「俺が北村敦だ！」

そう叫ぶと特殊隊員みたいな奴らが俺の身柄を抑えに来た。

「貴様は本当に北村敦だな」

「ああ」

「来い」

短い会話を終わると俺は二人に抑えられながら車に乗せられた。車は俺を乗せるなり、すぐ出発した。

俺の隣にはリーダーらしきおっちゃん、もう一人座っていた。

「君はずいぶん落ち着いているようだ。怖くは無いのかい？」

「怖いよ、もちろん」

「じゃあ、何故そんなに落ち着いてられるのだ？」

「俺は・・・」

俺は信じてる奴らがいる。

どんな時もありつらが来ることを信じてる。

「俺はあいつらが助けに来ることを信じてるからだ」

「そうか」

おっちゃんはフツ、と笑い俺の口にハンカチを被せてきた。

「！」

「君には少しの間眠ってもらおうよ。なあに悪いようにはしないから安心なさい」

ハンカチからは薬品の臭いがした。

俺はその臭いを嗅ぐとそのまま深い眠りについた。

「行っちゃまったな・・・」

「どっちゃって助けるんだよ」

「え？」

「どっちゃって助けるかって聞いてんだよ！」

石田が叫ぶ。

「俺にだってわかんねえよ！でも約束しただろ！？お前も少しは考えろよ！」

今度は対馬が。

不穏な空気。

それに耐えられなかった猟師のおっちゃん、テレビをつける。

「ただいま、関東上空です。ここ一帯は狂人病にて壊滅したようですが・・・あ！三台の車が走っています！」

その言葉に反応した猟師のおっちゃんがテレビを見入る。

「これ・・・さっきの奴らじゃねえか？」

今度は全員が見入った。

「本当だ・・・」

「あ！車が止まりました！場所は・・・蓮田製薬の工場だそうです！こんな場所に一体何の用でしょうか・・・？」

おもむろに対馬が立ち上がった。

「行こう」

「ああ」

石田が反応した。

「そうね・・・約束したし」

「敦は私達を待ってる」

「院長さん、お世話になりました」

飛驒がペコリと頭を下げた。

「いやいや。助けてもらったのはこちらだよ」
院長が笑顔で応えた。

「それよりも・・・北村君を助けてあげてください」
「もちろんです」

対馬達は車に乗り込みあの合言葉を叫ぶ。

「行くぜ！TBS！」
チームバカ騒ぎ

「おう！」

工場の地下に広がるのは・・・(前書き)

今回は対馬のセリフ多めかなーなんて思っちゃいます。

工場の地下に広がるのは・・・

「ここが製薬工場か・・・」

対馬達は敦が捕まっているであろう製薬工場に着いた。

「あいつらの車は無いけど・・・」
「せめて手がかりぐらいは見つかるだろ」

すでに敦を捕まえていた奴らが乗っていた車は無かった。
もしかしたらここには敦はいないかもしれないが何かしらの情報を
得られるかもしれない。

対馬一行は製薬工場へ入っていった。

「なんかいかにも『まずいもん作ってます』って感じの雰囲気だな」
「ああ、でも急ぎたいから全員バラバラで行動しよう。何か見つけ
たら無線機で連絡するように」
「了解！」「」

石田は『完全無欠の男勝りな女』と皆からは称されているが生涯
の怖がりでもあった。
学園祭のちゃっちいお化け屋敷でお化け役の人を半殺しにしてしま
う程だ。

ホラー映画なんて石田に見せると、半日は半狂乱に陥り、おもしろ
がって見せた人は逆に地獄を見る。
石田の一つしかない乙女要素でもあった。

そこには赤いペンキで「KEEP OUT!」と書かれた木製のドア。

ゴクリと全員が唾を飲み込む音がした。

「開けるぞ」

対馬がドアノブに手を掛ける。

ギギイ・・・という古びた音とともに空くドア。

「嘘・・・だろ？」

全員が息を呑んだ。

ドアの先にあつたもの。

それは・・・

「俺達の……町……？」

そこは皆が今まで住んでいた町。
赤い夕焼けが似合う町だった。

過去という盾。現在という矛。

「あれ？」

俺は何をしてたんだ？

ここは学校からの帰り道。

ああ、そうだ。

学校で野球やって、俺が逆転ホームラン打って、昼休みにパン争奪戦に巻き込まれて、対馬とふざけてたらちっちゃい子にぶつかって、謝ったら実は三年生の先輩で、帰り道飛驒と石田も含めたメンバーで他愛のないお喋りをして、今ここにいるんだ。

そうだ、全部思い出した。

「はあ・・・」

そうだ、今から一人の家に帰るんだ。

両親を亡くしてからもう、二年がたったので慣れはしたが一人で帰るといふの実に憂鬱だ。

気がつくともう家の前に着いていた。

もう一つため息をついてから俺はドアノブに手を掛ける。

「ただいまー」

返事が帰ってくるはず無いのにどうも癖が抜けなくて言ってしまうこのセリフ。

しかし。

「おかえりー」

え？

なんで？

なんで返事が返ってくるんだ？

俺は恐る恐るリビングに足を踏み入れる。

「あら、敦。おかえりなさい」

「おう、敦。今日は遅かったな」

なんで父さんと母さんがいるんだ？

「父さん・・・母さん・・・なんで・・・？」

「なんでって、なによ。変な子ねえ」

そっだよ。

俺は何言ってるんだ。

父さんも母さんも最初から消えてなんかないじゃないか。

「そっだよね。ゴメン。俺、野球で頭でも打ったんかな？」

「敦、お前病院行ったらどうだ？」

「なんだよ！父さん。失礼な！」

ハハハ、という笑い声。

こんなに楽しい日は久々な気がする。

「今日のご飯はすき焼きよ」

「お、すき焼きかあ〜。それは楽しみだなあ〜」

その後俺は今日あったことを父さんに話した。

野球でホームラン打ったこと。

昼休みにパンをかけて戦争が勃発したこと。

対馬とふざけててぶつかったちっちゃい子が実は三年の先輩だったこと。

帰りに俺、対馬、飛驒、石田で他愛のないお喋りをして帰ってきたこと。

「なあ、敦。今年の夏休みもキャンプに行くぞ！」

「へえ〜。どこに？」

「ああ、それは」

ピンポン。

「あ、俺出るよ」

俺は玄関を開けるとそこには、対馬、飛驒、石田、佐伯先輩がいた。

「あれ？みんな揃ってどうしたんだよ？佐伯先輩まで。俺今から夕飯なんだけど」

「敦。行くぞ」

対馬が俺の手を取り、家から引きずり出そうとする。

「なんだよ対馬。何処行くんだよ」

「戦いに行くんだよ」

「戦いつてなんだよ」

「戦いだよ」

「だから何と戦うんだよ！」

「ゾンビだよ！！」

俺は思いつきり顔を顰める。

「何言つてんの？お前ついに現実逃避始めたか？」

「現時逃避してんのはお前だろ！！！！」

対馬は俺の顔を思いつきり殴ってきた。

「いきなり何すんだよ！！？」

「お前が助けに来いつて言うから来たんだよ！そしたらなんだ！？この有様は！？俺達をリーダーとして導いてきたお前はどこへ行った！？」

「俺が何時逃げた！？」

「今だよ！お前は今過去にすがり付いて逃げてんだよ！過去を振り返るなどと言わない。だけど、過去を盾にして逃げようとはするな！！！！」

思い出した。

俺は学校でゾンビの襲撃を受けて、車で警察署に行つて、峠で怖い目にあつて、病院の人たちを助けてそして俺は捕まった。

そして、俺の親はいない。

「すまん。みんな」

「いいよ、それ以上は言うな。それよりも・・・」

俺が顔を上げると対馬は顎で後ろを指す。

「お前のご両親が見送りに来たぞ」

振り返ると父さんと母さんが玄関で悲しそうな、しかしどこか嬉しそうなの、なんとも言えない笑顔で立っていた。

.....行つてこい.....

父さんが言う。

.....行つてらっしゃい.....

母さんが言う。

「・・・行つてきます」

俺は父さんと母さんから背を向けて仲間のもとへ歩き出す。

今ここで逃げるわけには行かない。

だから俺は叫ぶ。

「いくぜ！TBS！」
チームハカ騒ぎ
「「「「「おっ！」」」」」

人は過去を振り返る。

過去とは人生の足跡と誰かが言う。

その足跡は時という風邪に消されるかもしれない。

それならどんどん増やしていけばいいじゃないかと誰かが言う。

俺は足跡を増やしていく。

仲間と共に。

決して、歩みを止めない。

やあ、また新しいのが現れたらしいじゃないか。ワロスワロス 現実逃避（前書

なんか最近シリアスみたいになってきて困ってます。

ほんとはもうちょっとおもしろおかしくするはずだったんですけど
ねえ？

やあ、また新しいのが現れたらしいじゃないか。ワロスワロス 現実逃避

「敦はなにも覚えてないのか？」

「ああ、車に乗せられた後眠らされてな。気がついたらここにいた」

俺達五人は地上への出口に向かっていた。

「にしてもリアルに出来てるよな。こりゃ一体どうなってんだ？」

「一体こんなもん作って何がしたかったんだ？」

確かに。

一体俺をここに閉じ込めて何がしたかったんだ？

対馬達の話の聞く限り警備が一人もいなかったらしいし。

「でも一人もいないわけじゃないのよ」

「『『『え？』『』『』』」

佐伯先輩がおもむろにそんなことを言った。

「誰かがいるのよ。しかもずっと私達の後を追ってね」

「佐伯先輩・・・あんた案外凄いいんじゃない？」

「言ったでしょ？普通の家庭とは育ちが違ってる」

「さいですか」

そんな会話を最後に俺達は立ち止まりゆっくり後ろを振り返った。

「ほお・・・ばれてましたか」

そこにいたのは黒いローブを着て、鉄仮面を被った男。

佐伯先輩が目を細める。

「あんた・・・何者？」

「応えるほどの者ではありません」

クツクツク、と笑う鉄仮面。

仮面のせいでその表情は見えないが。

「対馬、俺の武器よこしてくんねえか？」

「すまん、ナイフとUSPとそのホルスターしか持って来てない」

「それだけありゃ十分」

俺は対馬から武器を受け取る。

「今回俺達は援護に回りそうだな」

「ああ」

佐伯先輩が俺達の前にでて刀を抜く。

「今回は私にやらせてもらっわ」

鉄仮面は佐伯先輩をみるなりハッハッハッハッハとが腹を押さえ
て笑い出した。

・・・というか爆笑。

「その身長でかっこいいこと言ってるやがる。ワロスワロス」
「ちょ・・・バカにすんじゃないわよ！」
「その気持ちよく分かる。そのうち刀に身長抜かされるんじゃない？」
「刀は成長しないわよ！つーかアンタ私の味方でしょ!？」
「いやいやでもさあ、『卍・解!』とか言ったら刀でかくなるんじゃない？」
「それは漫画の話でしょ!？現実とゴツチャにしないでよ!！」

なんかこの部分だけは鉄仮面と息が合いそうだ。

「とりあえずアンタは俺達の味方ではなさそうだな」
「そうかい？私は君達の敵でも味方でもないよ」
「は？」
「ただし・・・」

鉄仮面はおもむろに右手をこっちに向けた。

「私は君達の『敵』と呼ぶ存在に『造られた』んだけどね」

瞬間、俺達に何かが飛んできた。

「うお!？」

俺は右に飛んで回避した。

ほかの奴らもどうにか回避していた。

「なんだあれは!？」

俺は何か飛んできた方向をみて仰天した。

それは『飛んでいた』ではなく『伸びていた』と呼ぶべきだった。

俺達が襲われたのは鉄仮面が伸ばした腕だったのだ。

「あいつ・・・人間か!？」

腕が伸びるなんて人間には出来ない技だぞ!？

俺が知ってる中でも腕を伸ばすのはドラゴンボールのピッコロくらいだ!!

「クソツたれが!!」

俺は牽制のためにUSPを何発か撃った。

片手で撃ったため手の中で暴れてほとんどの弾があさっての方向に飛んでいったが一発だけ胸に当たった。

「よし!」

いくら腕を伸ばす超人だろうが、胸を撃たれば無事ではすまないはずだ。

しかし。

「それがどうしたというのかね？」
「な!？」

貫かれたはずの胸から血が出ない。
穴は開いている。
でも。

「この程度じゃ死なないよ」

その穴は数秒もしないうちに埋まってしまった。
再生能力まで備えているだと!?
それこそまさにピツ　ロじゃねえか!?

「今度は私が行こう」

鉄仮面は一気に跳躍して飛騨のもとに近づいた。

「飛騨ッ!？」

鉄仮面は俺が言うか早いか飛騨の首を掴み飛騨の体を中に掲げた。

「ク・・・ハッ」

飛驒の足は浮いていたのでこのままだと窒息死してしまう。

「飛驒！！」

俺は鉄仮面に駆け寄りナイフを抜いた。

「邪魔ですよ」

鉄仮面は空いていた左腕で俺のことを殴った。

「グウツ！？」

俺は飛ばされる瞬間確かに見た。

鉄仮面が飛驒に何かを囁いてるところを。

「その手を離しなさい！！」

佐伯先輩が俺を殴り隙が出来た鉄仮面の右側に回り込み飛驒を掴んでいた右手を日本刀で一閃した。

するとその腕は簡単に切り離され、飛驒も地面に落ちた。

「チツ！」

鉄仮面は佐伯先輩からバックステップで距離を置き、肩で息をしていた。

「さすがにこの私もこの腕は再生できません。まあ、死にもしませんがね。今日はここまでにしめよう。また、会えるときを楽しみにしますよ」

そう言って鉄仮面はどこかへ消えた。

「一難去ったか・・・」

そのあと俺達は地上に出て、工場の中を一通り搜索したあと、工場を後にした。

俺は工場の外に出て車に乗り込む前、飛驒に一つ聞いた。

「なあ・・・さっき戦ってる時、お前鉄仮面に何を言われた？」

飛驒は目を見開き俺を凝視した。
しかしすぐにいつもの顔に戻り、

「何も言われてないよ」

と答えられた。

一体飛驒は何を言われたのだろうか？

番外編 復讐復讐復讐復讐復讐復讐（前書き）

今回の主人公は前回出てきた鉄仮面です。
鉄仮面と戦ったその後のお話です。

番外編 復讐復讐復讐復讐復讐

「クツ・・・」

切られた右腕が痛む。

さっきの戦闘で右腕を失ってしまった。

いくら私でもこの重症を完全に再生することはできない。
せいぜい傷口を塞ぐ程度が限界だ。

私は帰るべき場所に辿り着いた。

唯一私が安心できる場所。心を委ねることができる場所。
そして私の仕事場でもある。

「只今帰りまし・・・た？」

私は絶句した。

そこには沢山の死体や、夥しい血が散乱していたのだ。

「どういうことだこれは!？」

一階の人たちは全滅だ。

息をしている人が一人もいない。

どの死体にも複数の銃で撃たれた痕があった。

「奴の差し金か・・・!」

こんなことをする奴はただ一人。

あいつしかいない。

私が裏切ったからだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

二階に行くとき親しかった初老の男性が壁にもたれかかっていた。やはり撃たれた痕があり、虫の息だった。

「アンタか・・・」

「一体・・・何があつたんですか・・・？」

「今朝攻めて来た奴らがまたきやがつてな、アンタをだせつて言ってきたんだ。今はいないと言うと無差別に攻撃を始めたんだ。老人から子供まで。男女問わずに撃ち殺された」

「私の・・・せいですか・・・」

「いや、あなたのせいじゃねえよ・・・」

男性はニヤリと笑う。

「本当に・・・すみません・・・」

私は泣いていた。

私の全てを捧げた場所であり、人間で無くなってしまった後も私を慕ってくれ、自らを犠牲にしても守りきる決心をした場所。

それがものの数時間で消えてしまった。

「もう、謝るな・・・」

「でも、私のせいで・・・」

「俺は感謝してるぜ・・・。ありがとよ、せ・・・グハッ!」

彼は血を吐いた。

「ふ．．．。どうやら先は長くないらしい．．．。楽しかった、ぜ．
．．．」

彼は力尽きた。

「ツ．．．！クソオオオオオオオ！！！！！」

憎い！奴が憎い！

私から全てを奪った奴が死ぬほど憎い！

「ククク．．．。ハハハハハハ！！！！」

私はフラフラと立ち上がる。

「奴をこの手で．．．この手で殺してやる！！」

立ち上がった私の目は復讐の炎に燃えていた。

次の目的地は何処？（前書き）

いやー、今回はがんばってコメディ（風）にしました。

次の目的地は何処？

「なあ敦。最終的にはどこ行くんだ？」

対馬が出発直前に当たり前のことを聞いてきた。

「蓮田製薬に決まってるんだろ」

俺は当たり前のことを返した。

「でもお前をここに幽閉したのは恐らく蓮田製薬だぞ！？」

「だからなんだよ？結局ぶっ飛ばしてればいいんだろ？」

「あいつらは俺達の装備をかなり超えているはずだ！そんなのに飛び込んでいくなんて」

「だってあいつら許せねえもん」

俺はキレていた。

「・・・は？」

「あいつらが恐らくゾンビを造って、その上俺を誘拐して、拳銃の果てには幻想まで見させやがって」

全く。

人のことを何だと思ってるんだ。

「絶対ぶっ潰す」

対馬は俺のことをポカンと見つめた後、ハハッと笑い、
「そうか。これはお前の復讐か」

「そうだな」

俺は絶対ぶつ潰す。

俺達の世界を壊した奴らを。

「俺達はお前の復讐に出来る限りの手伝いをしよう。交換条件は一人も欠けずに俺達を脱出させることだ」

「ハッ、そんなのとづくに覚悟してたよ」

守る。

俺の仲間を。

「よろしくな」

「ああ、よろしく」

俺には何の力も持っていない。

俺は普通の高校生。

何か特別なことがあるといえば、守りたい仲間がいることぐらいかな。

「さて、次の目的地はどこにするんだ？」

「あー、いい質問ですね。石田さん」

俺は地図を地面に広げた。

「えーと蓮田製薬はここ。色々道草食ったから車を飛ばし続けてもあと一日はかかるな。とりあえず、後四時間もすれば日が落ちると思うから……三時間程度で着くこの遠山芸術高校に避難させても」

らうか。でかいから多分生存者もいるだろ。質問、又は反論は？」

「はい」

「はい、飛驒さん」

「おやつはいくらまでですか？」

「対馬くん。俺のUSP取って」

「ちよつと！たまにはボケさせてよー！」

「おい敦。USPよりMP5の方がいいんじゃないか？」

「ああ、そうだね」

「大樹も！なにちゃっかりMP5渡してんの！？」

「さて、飛驒さん。何か言い残したことは？」

「・・・」

「死ね」

「ええええ！？」

「ハハハ！！！」

いやーたまには飛驒をいじるのはおもしろい。

「さて、他に質問はないかな？」

「ほーい」

「はい、石田さん」

「あのさ、学校ってことはゾンビも沢山いんじゃない？」

「可能性はあるな。でもでかかってことはゾンビがいなくてころもあんじゃない？」

「ほうほう」

「つーか石田がまともな質問するなんて珍しいな」

「おーい、対馬。金属バット持ってこーい」

「はいよー」

「ちよ、対馬！？親友に裏切られた！？」

「ねー、由美。こつちのナイフの方がいいんじゃない？」

「あー、そうね。ありがと陽子」

「それ俺のナイフ！飛驒、お前反省したんじゃないのか！？」

「し・か・え・し（はあと）」

「・・・」

「さて、敦。遺言ぐらい聞いてやろう」

「石田。お前は最後まで漢おとこだった」

「殺す」

「ごめんなさい」

俺は土下座をして許しを媚びた。

多分、許してくれた。

でも、鳩尾に蹴りを五発入れられたけど。

「さ、さて。出発と行こうか・・・」

「敦・・・死にそうだな」

「飛驒と石田のせいだね」

「いい気味」

「・・・」

俺は精神的にも凹んで車に乗り、静かにカーナビを遠山芸術高校にセットした。

ポーン

シネバヨカッタノ・・・

「お前もそれを言うかあああああ!？」

カーナビにも苛められる俺だった。

日本刀と金属バットと新たな仲間（前書き）

また新たな登場人物が増えます。

ややこしくなるかもしれませんが、そこはあしからず。

日本刀と金属バットと新たな仲間

みんなから苛められること三時間。

俺達は遠山芸術高校に到着した。

にしても……

「いやー広いなーここ」

でさえ、とにかくでさえ。

土地だけなら、東京ドーム二つ分はある。

本当に高校ですか？

「さて、ここからは手分けして生存者を探そう。二人一組で分かれる。とりあえず俺と飛驒で南校舎。

対馬と石田は北校舎。佐伯先輩はここに残って監視ってことで」

「了解！」「」

「ちよつと！私だけ何故一人！？」

「それは……」

俺は嘘で固めた笑顔で答える。

「佐伯先輩を信用してるからですよ」

「えっ……」

佐伯先輩は俯いてオロオロして、俺のほうに向きなおしてしつかりと答えた。

「南校舎三階にて生存者発見！ゾンビに襲われてるようなので全員光のあるところに集合！」

「「「イエッサー！」「」」

俺は皆が分かるように走りながら廊下の電気をつけた。

にしてもさっきの悲鳴、聞いたことあるような気が・・・？

「にしてもこの声女だよな？なんつー汚ねえ言葉使いしてんだ・・・

「ほんとに、ねえ？」

どうやら声の主は美術室に立て籠もってるようだった。

その証拠に美術室の扉から光が漏れていて、その周りに数十体のゾンビがうろついていた。

「おーい生存者の諸君。今助けるからねー」

俺はそう言っ取りあえずMP5の引き金を引いた。

結論から言おう。

正直今回の戦闘は暇だった。

五分もしないうちに佐伯先輩が到着。

日本刀で接近戦に出られると、流れ弾が当たる可能性が出るので、

ナイフで応戦。

そのうち対馬と石田もやってきて、石田が金属バットを振り回し、佐伯先輩が日本刀でバツバツサバツサと切り捨て修羅場と化していた。

結局俺達はやるのがなくなってしまったので、対馬はそこらでごろ寝、飛驒はバッグに入れて持ってきていた小説を読み始め、俺は体育座りをして戦闘を見学。

たまに俺達の所へやってくるゾンビはUSPで排除。ものの五分程度で全滅させた。

にしても・・・

佐伯先輩強くな？

日本刀装備してからありえんでしょ。

まさに鬼に金棒。

いや、鬼は言いすぎか。

せいぜい、の 太に金棒ってところか。

「いやーいい運動になった」

「ほんと、ストレス解消」

これからはこの方々に逆らうのはやめよう。

「おーい、生存者の諸君。ドアを開けてくれー」

「はい今開けまーす」

ガチャガチャ・・・

あれ？

「あのー、もしかして・・・」

「ごめんなさーい！慌てて鍵閉めたら壊しちゃいました！テヘッ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

ああ、面倒くせーな。

「じゃあ、今から壊すからあんた達どいてなさい！」

そんな恐ろしい言葉を石田が平気で放ち、金属バットを構えた。

「うりゃああああああああ！！！！！」

そういつて思いつきり金属バットでドアをぶっ叩いた。

ドカーン！と派手な音を立ててドアは・・・

派手に凹んだ。

「ゴメーン！力足りんかった！テヘッ」

石田がテヘッってやるとかなり悪寒が走った。

「おい、敦。殺されたいのか？」

「人の心読まないでくれます!？」

さて、ドアが凹んでは無理やりこじ開けるのは出来なくなった。
わかるぞ。ドアよ。

俺も散々心を凹ませられたからな。

凹まされたら開きたくなくなるよね。

「仕方がない。私が開けるわ」

そんなことを言い、佐伯先輩がおもむろにドアの前に立った。

「居合い切りって久々なのよね。うまく出来るかな？」

佐伯先輩は刀に手を掛ける。

シュピン！シュピン！シュピン！（ドアを切る音）

見えない！早すぎて刀の動きが見えない！

ガララララ！という音を立ててドアは崩れ落ちた。

「またつまらぬものを切ってしまった・・・」

五 衛門ですか!？あなたは!

これからあの刀は斬鉄剣と呼ぼう。

とりあえず扉も開いたことなので入ることにした。
中には男子が二人。女子が二人、合コン状態だった。
リーダーらしきシルクハットを被って髪を後ろで縛った身長15
5cmぐらいの同年っぽい女子が挨拶に出てきた。

「いやー、ありがとうございます・・・す?」

「いやいや、それほどでも・・・ん?」

お互いに指を指して叫んだ。

「お前(君)は!!!」

小学生から中学生まで親友で悪友。

「服部莉久!」

「北村敦!」

そう。

そいつは服部莉久。

将来の夢はマジシャン!とか言ってたような言ってなかったよう
な。

「なんでお前がここに!?!」

「いや、だって僕、遠山芸術高校の生徒だから・・・君こそ何故?」

俺は今まで起きたことを全て話した。

「ふーん、そういうことが・・・」

「ああ、にしても久しぶりだなあ!」

周りの奴らはポカンとして状況についていけてなかった。

「なあ敦。こいつ誰？」

「ああ、小学校から中学生まで親友で悪友。似非マジシヤンの服部莉久」

「ほお、似非マジシヤンとは言ってくれるじゃないか。この役立たず」

「ハッハッハ、死ね」

「ふっふっふ、土に還れ」

「……」

お互いに笑わない目。

そう、これは戦いのゴング。

「殺す」

「……えええ！？」「」「」

そういつわけで俺と莉久は殴り合いを始めた。

「この、タネがバレバレのくせに！」

「それは君がバラすからだろ！？足が長いことぐらいしか取り得がないくせに！」

「俺は普通に結構！」

「死ね！村人A！」

「だまれ、インチキマジシヤン！」

「なんか、不毛ね」

「ああ、不毛だ」

「くっ、やるじゃないか敦！」

「この非現実状況におかれて脳内でアドレナリンが分泌されて通常の戦闘力の1.5倍は出ているのだよ！」

「奇遇だな。僕は1.8倍だ！」

「『『『あんま変わんねえじゃん』』』」

莉久は地面を蹴って、俺の顔面を狙って殴りかかってきた。俺はそれを体を右に逸らして避ける。

「避けることだけは達者だな！」

「おかげ様で、な！」

しかし、体力勝負となると面倒くさい。

次の一撃が最後になるだろう。

しかし、どうやって決めるか・・・？

ん？

俺の取り得は奴が言った通り足が長いことだけ。

奴の身長は約155cm。

ならばおのずと戦い方は見えてくるはずだ！

「これで、終わりだ！」

莉久がまた俺の顔面を狙って殴りかかってきた。俺はそれを一歩後ろに下がり足を上げる。

ドグシャア！という鈍い破壊音。
俺の足は莉久の顔面を捕らえていた。

莉久の拳が俺の顔面に届くことはなく、俺の脚に顔を埋めて勝負は決まった。

「いやー、ついに僕もかなわなくなったか」

「お前、一度も俺に勝ったことないだろ」

莉久は鼻にティッシュを詰めて椅子に座っている。

「あんたら・・・しょーもない喧嘩してんのね」

俺達はみんなに飽きられてしまった。

まあ、あんな不毛な戦いをみせたらそうなるだろう。

「あーそういえば、この学校には君のことがだーい好きなあの子もいるよ」

「げ！亜由美がいんの!？」

「うん、今隣の準備室で寝てる」

「ねえ、亜由美って誰？」

「ああ、俺のしんゆ・・・」

「ちよっと黙ってくれないかな？私は疲れているんだが・・・」

準備室から出てきたのは手塚亜由美。

身長は160cmで髪は結ぶことなく伸ばしている。出るところは出て、引つ込むところは引つ込む。恐らく十人中七人は可愛いと答えるであろう。見た目は、ね。

俺と亜由美は目が合う。

亜由美は目を輝かせて俺を見つめる。
俺は死んだ目で亜由美を見据える。

「敦！」

「亜由美かぁ・・・」

亜由美は抱きつかんとばかりに両手を広げて抱きつかんとばかり駆け寄ってきた。

俺はそんな亜由美を受け止める・・・わけでなく。

「人前で何晒してんじゃゴラアアアアア！！！！」
「グフウ！」

顎に一発。

「何故だろう？何故こんなにも愛しているのに拒否されるのだろうか？」

「それは愛し方がおかしいからだ」

「こいつは手塚亜由美。俺の小学、中学時代のしんゆ」

「恋人だ！どうぞよろしく」

「勝手に恋人にしてんじゃねえ！」

「グハア！」

俺は亜由美の顎にもう一発かましてやった。

「こんなに可愛くて敦を愛してくれる人なんてなかなかいないねえだろ。付き合っちゃえばいいのに」

「そうだぞ敦。あれ？こんなところに婚姻届が・・・」

「色々あつたんだよ。色々」

そんなわけで仲間がまた増えたんだが・・・。

何故だろう？

飛驒の視線がとても痛い。

なんか強敵が現れる時つて必ず双眼鏡を覗いてる気がする。

遠山芸術高校に避難した俺達はゾンビとの遭遇有り、謎の再会有り。

かくして、俺達五人＋遠山五人でグループを組むことになり、とりあえず一夜をここで明けることになった。

「にしても、なんで俺とお前で監視なんてやってなきゃいけないだよ……」

「いいじゃないか これであいつらがいなけりゃもつと最高なんだけどな」

「そんでもつてお前もいなきゃもつと最高だ」

俺と亜由美のペアで早朝の監視シフトをまかされたのだが、このペア決め。

完全に仕組まれてる。

断言しよう。完全に仕組まれている。

大事なことなので二回言いました。

ちなみに壊したドアは木材などでバリケードを作った。

「にしてもお前、ここでどれくらい腕を磨けたんだ？」

「まあとりあえずいくつか賞はもらってるし、それなりに手こたえを感じてる」

「それはよかったな。お前の絵は独創性満載だから」

「うん。あの時敦が背中を押してくれて本当によかったよ」

そう。

俺が亜由美の背中を押した。

「莉久はうまくやってんのか？」

「ああ、時々路上パフォーマンズなんてものもやってるし」「そっか」

俺達が最近のことを聞きあつたりしていると次のシフトの奴らが来た。

こいつらは、飯塚というマッチョメン。そして森羅というオドオドした女子。

「時間だ。とりあえずあと二時間ゆっくり休め」

「お、ありがとう」

「て、手塚さん！私の番・・・」

「ん、どーも」

そういつて飯塚に双眼鏡を渡した。

さて、もう一眠りするかな。

ファ〜という欠伸をついて、準備室に入ろうとしたその時。

「な、なんだあれは!?!」

「ん？どうかしたのか？」

あきらかに飯塚は震えていた。

「アレ・・・見てみるよ・・・」

「ん？なにになに・・・」

俺が双眼鏡を覗くと信じられないものが目に飛び込んできた。だからこそ。

「な、なんですとおおおお!!!???.?」

つい叫んじゃいました

「何があつた!?!」

飛び込んできたのは対馬。

「なあ、対馬。最近のゾンビってすごいな」

「は?」

「いやあ、でかい奴はいるわ、腕伸ばすのはいるわ、拳銃の果てには……」

俺は双眼鏡を対馬に渡して耳元に囁く。

「最近のゾンビって、走るんだな」

「ハイ、第二回ゾンビ対策会議をはじめます」

一同、なんとなく礼。

「えーさつきも言ったとおり、また新種のゾンビを発見しました。

今度は走るゾンビです。正直やべえ。生き残れる気がしなくなってきた。まあ、とりあえず、ここには初めてあった奴らが沢山いるのでとりあえず自己紹介から。俺は北村敦。TBS《チームバカ騒ぎ》のリーダーです」

とまあ、流れに流れて遠山組。

「僕は服部莉久。特技はマジック。よろしく！」

「私は手塚亜由美。ここで絵を書いていた。敦の嫁だ。よろしく」

「ふざけんな」

「俺は飯塚歩。木工をやったからチェンソーを使うぐらいの知識はあるぞ」

おお、いい戦力になりそうだ。

「わ、私は森羅依子。よ、よろしくお願ひしましゅ！」

あ、噛んだ。

「僕は九条文也。特技は・・・ギターかな」

この特技が生き残ることに役立つだろうか・・・？

「私は鈴木沙耶。ここにいる誰よりも知識に長けてる自信があるわ」
うわあ、すげえ偉そう。

「で、君達はどうやって生き残ってきたの？武器は？」

「ああ、それなら俺が」

そういつて飯塚が手を挙げた。

「俺達は放課後ここで自主練習しててな、その時ゾンビ騒動が起きたんだ。たまたまここにあったチェーンソーを使ってゾンビを倒していった」

そういつてほら、と言わんばかりに俺に二台のチェーンソーを見せてきた。

確かに夥しい血が付いていた。

「食料とかは？」

「ここに水道はあるし、冷蔵庫もあるからな。ちなみに冷蔵庫は服部の私物だ。俺達はこの部屋を部活に使うんでな、必要だろうって服部が持ってきた」

「へ、へえ……」

それでいいのか、部活の顧問。

「ま、思い出話はこちらまでとして、詳しい脱出方法とか考えないと敦、なんか考えないの？」

「うん……ここまで人数が多いと先に何人かが駐車場に降りて車を玄関に持ってこないと危ないんだよなあ……」

五人だけなら今すぐにでもここを出て駐車場まで行くんだが、今回は人数だけに全員で移動するのはきつい。

「チーム分けとしては・・・佐伯& a m p ; 対馬と石田& a m p ; 飯塚でペアを組もう。とりあえず、最初に下に降りて車を持ってきてくれ。あとは適当に振り分けてチームを作ろう」

以下チームの振り分け。

Aチーム

佐伯伊那 (運転)

対馬大樹 (運転& a m p ; リーダー)

九条文也

飛騨陽子

服部莉久

Bチーム

北村敦 (リーダー)

石田由美

飯塚歩

森羅依子

手塚亜由美

さて、チームは決まった。

次は武器だ。

Aチーム

佐伯伊那 (日本刀、又の名を斬鉄剣)

対馬大樹 (チェインソー)

九条文也 (俺のMP5)

飛騨陽子 (USP)

服部莉久 (対馬のUSP)

Bチーム

北村敦 (USP、ナイフ)

石田由美 (金属バット二本)

飯塚歩 (チェンソー)

森羅依子 (石田のUSP)

手塚亜由美 (飛騨のMP5と敦への愛)

「さて、すべて決まったところで脱出と行こうじゃないか。行くぜ！TBS！」

「「「「おう！」「」「」

「「「「お？おー」「」「」

その前にまずは始めて銃を扱う皆さんに構え方と、扱い方講座。
うん、やっぱりなんか変ww

と、いうわけであいつらがたどり着くまで俺達は玄関で待機。
予想通りゾンビたちは音に集まり玄関で攻防戦を行っていた。

「クッソ！これじゃ埒があかねえな！」

「敦！何かいい方法ねえの！？」

「うーん、じゃあみんな目を瞑れ！」

「「「「は？」「」「」

「スタングレネード！！！」

投げた後俺は目を瞑り耳を塞ぐ。

キーンという音の後俺は目を開けた。

するとさっきまで威勢のよかった(?)ゾンビたちはそこらじゅうに倒れていた。

「今のうちに処理しとけよー」

「耳塞げっていつてくれよー！」

「スマンスマン」

そういつて俺はUSPで沢山のゾンビの頭をうち抜いた。

パン、という銃声とキューーンというチェーンソーの唸り声。

玄関は血の海と化した。

「今、駐車場に着いた！今からそっちに向かう！」

「了解！」

あと五分ぐらいで来るだろう。

俺達は安心した。

「おーい、着いたぞー！」

予想通り五分後に対馬達が車に迎えにきた。

「よし、全員乗り込めー！」

俺は愛着のある(?)うざいカーナビも(?)アイシスに乗り込む。

「よっしゃあ！出発ー！」

「くっそ！」

俺は助手席の窓を開けた。

ゾンビはこちらの顔が見えるとニヤリと笑った。

ん？

何か引つかかるものがあつたが、迷う暇はないのでUSPを引き抜き頭に狙いを定める。

パン！パン！と二発撃つてみたが、車に乗ってるからかなり揺れてしまったため狙いが外れ胸に当たった。

「グアアアアアア・・・」

ゾンビが胸をおさえて苦しそうに減速していく。

あれ？

おかしい。

確かゾンビには痛覚が無いはず。

でもあいつらは痛みを感じてたってことは・・・

「おい対馬！後ろを開ける！」

俺は怒鳴る。

「そんなことしたらやられるんじゃないか？揺れるから頭にもあた
らねえだろ」

「あいつらは痛覚がある！頭に当てる必要はない！」

「何・・・？わかった。準備ができたら開けてやる」

俺はシートベルトをとり、一番後ろの席に立つ。

「準備OKだぜ！開けるぞ！」

「何をするつもりだ・・・？」

一緒に乗っていた亜由美に問われる。

「撃退するのさ」

俺は火炎瓶とライターを出す。

ピー、という音と共に扉が開いていく。

「どうやって!?!」

俺はライターで火炎瓶に火をつけた。

走るゾンビは数十メートル先で少しずつ間を縮めながら走っていた。

「じつやって、さー！」

俺は火のついた火炎瓶を道路に叩きつけた。

すると中から燃料が溢れ出し引火。

そこ一体だけ小規模な火事になった。

そこを通過したゾンビたちにも引火し、苦しみながら減速していく。

しかし、何体かのゾンビには引火しなかった。

「チッ！」

俺はMP5を構えた。

「みんな！銃を構えろ！頭に当てなくてもいい！胸を狙え！」

その掛声と共にみんなが我に返った。

結局数十体いた走るゾンビは全滅した。

「ふう……一件落着、か」

俺は銃をおろした。

「対馬ー、閉めていいぞー」

俺はそう言い席をまたがりながら助手席に移動。

「全部倒したからどこかで止まるっ」

俺は無線機に話しかけた。

「了解。これから速度を緩めるわ。そうね……3キロ先にあるガソリンスタンドに止まりましょう」

俺達はガソリンスタンドで休憩をとることにした。

「いやーにしてもさっきの奴らは強かったな」

「ほんと。隣につかれたときはどうしよかと思っただぜ」

「それでも勇敢に立ち向かった敦はかつこよかったぞ。さすが私が惚れた男だ」

「まあ、いくつもの修羅場を生き抜いてきたんで」

「敦君ー？何イチャイチャしてるのかなー？」

飛驒がこめかみに青筋を浮かべながらやってきた。

「お、おい？飛驒？なんか怖いぞ？」

「何故だろー？人間って不思議」

ここにまた一つ修羅場が完成した。

「にしてもあいつら痛覚があつたよな」

「ああ、それに俺が窓を開けたときアイツら、ニヤって笑つたんだ」

「うわ！キモッ！！」

飛驒の虐待から復活した俺はみんなと反省会をしていた。

「俺思つただけけど、あいつら段々鉄仮面に近づいてきてね？」

「は？どういうこと？」

「ほら、最初はただ喰らうことだけを考えたゾンビ。次は視覚も加えたでかい奴。^{キガシテス}そして今の走る+痛覚が追加された奴ら。名前は・ランナーとしておこう。うん。今決めた。で、おそらく奴らの頂点に立つのが鉄仮面。さっきは走るゾンビは数体しかいなかったけど、そのうち・・・量産されるだろう。それならまだしも、もし鉄仮面みたいな奴が量産されたら・・・俺達、終わりじゃね？」

みながゴクリと生唾を飲み込んだ。

「じゃあ・・・はやく脱出しないとな」

「そついつこと」

俺は立ち上がる。

「次の目的地は最終目標の蓮田製薬。その前に出来る限りの準備をしておこう。奴らが恐らくゾンビを作ってるからな。俺をさらったのも恐らく奴らだ。最後の準備を終わらせたら最後の決戦といこうじゃないか」

「そうだな。これで終わりにしよう」

「まずは武器を作らないとな」

「ここからなら・・・このホームセンターが近いかな」

「じゃ、パイプ爆弾とか作れるか」

「恐ろしいものを作るのね!？」

鈴木が突っ込みを入れられた。

そうか、こいつは突っ込みキャラか。

「さっきの火炎瓶を作ったのも俺だけど？」

「え・・・」

なんか黙ってしまった。

よく分からないけど、なんかまずいこと言った？

「とりあえず・・・」

石田が立ち上がる。

「生き延びて脱出したらみんなできっか遊びに行こうぜ」

「お！いいねえ」

「それなら・・・」

今度は莉名が。

「私も頑張らなきゃなあ」

「そうね」

「そうだな」

「もちろん！」

みんな口々に言葉を発しながら立ち上がる。
気がつく十人の円陣が出来ていた。

「いいか。みんな。最終目標は今回の事件の元凶、蓮田試薬をぶっ潰すことと、全員で脱出することだ。
なにかあっても仲間を見捨てるな。俺は仲間が傷ついたら助けるぞ。
それじゃあ・・・」

俺は静かに右腕を真ん中に出す。
それを合図に皆も腕を出した。

「いくぜ！チームハカ騒ぎTBS！」

『おっ！』

逃げて、倒して、深まって。(後書き)

そろそろ最終回も近づいてきました。

なお三日間は更新できません。
ご了承ください。

最後の準備かぁ・・・

「なぁー敦。これでいいかー？」

「おー。それぞれ。その花火火薬だけだしといてー」

その後、俺達はガソリンスタンドで一夜を明かし、ホームセンターに来た。

そこで最後の準備をしているのだ。

「おー、北村ー。鉄パイプってこれでいいのカー？」

「あー、それぞれ。飯塚それ12cmぐらいにチェーンソーで十等分にしといてー」

そうそう。

ホームセンターには異常ともいえるほどのゾンビがいたが、悪鬼石田、マツチヨメン飯塚、最後の侍佐伯先輩が全滅させた。

「おい！敦！燃料置いてあったぞ！」

「あー、サンキューー。ビンに詰めとけ」

主に作ってるのはパイプ爆弾と、火炎瓶だ。

作り方は・・・割合させて頂く。

「敦ー。画鋏見つけたぞー。受け取れ。私の愛と一緒に」

「画鋏だけ頂こう」

「ねー敦？この釘。無性に投げたいんだけど」

「いや、それはやめよう。飛騨。死人が出る。まずはそこに置こうか」

なぜか最近飛驒が好戦的になった。
顔は笑ってるんだけど目が笑ってないから怖い。

「終……………了……………」

パイプ爆弾十本

火炎瓶十本

計二十本を作り上げた。

ちなみに現在午後八時。

お外は真っ暗。

「アンタ……捕まるわよ？」

「いやいや、森羅。この状況で警察を恐れるのはおかしいと思っぜ。
よく生き残れたな。つーかおまえも共犯だろ」

「うっ」

うーん。

鈴木はなにが納得いかないのだろうか。

「さて、もう夜だから今から行動するのもなんなのでもう一日こ
で明かそう。出発は午前八時。今日は皆さん早めに床についてくだ
さい」

『はい』

「ではいまからシフトを発表します」

今回のシフトは俺と対馬。
無理やり亜由美は外してみた。
ちなみにちよつとした出来心で亜由美は飛驒とペアだ。
大丈夫かなあ。
血の雨が降らないことを願う。

「ついにここまで来たな」

「あー」

「まあ、なにげに楽ーに進んだところもあつたけどな」

「あー」

「なー敦。俺、明日には石田に告白できるかな？」

「あー・・・!?」

「俺、明日脱出でき・・・」

「やめろ！前にも言つたる！それは死亡フラグだ！」

「あー、そんなこと言つてたな。でも気にしてらんないって」

「・・・そうだな」

そのうち、時間がきたので飛驒グループがきた。

「敦、交代だ。ゆっくり休むがいい。終わったら夜這いしてあげるから」

「やめろ。困る」

「・・・チツ」

「舌打ちした!?」

「（なんで私がこの女と一緒になのよっーかこいつ敦の何？恋人？なわけないわよこんな女のどこがいいのよまったく・・・）」
「飛驒さん！見えるよ！私にも見える！」

「あなたって・・・敦の何？」
「ん？親友だけど？」

私はこの手塚亜由美という女とシフトを組んでいる。

「あんなにアピールしといて親友なんだ」
「ああ、私は愛しているが、な。敦が愛してくれないなら親友でいい」

「ふーん・・・」

何この女。

わかんない。

「私あなたのことよく分かりそうもない」
「いいさ。脱出したらいやと言っほど分からせてやる」

脱出したら、ねえ。

「おーい。陽子。時間」
「あ、由美。ありがとう」
「あーゆみ！時間だよ！」
「莉久か。ありがとう」

「なあ、お前って敦の親友なんだろ？」
「え？うん、そうだよ」
「敦ってどんな奴だった？」

「んー、いまと変わらないよ？いつも馬鹿して、私とマジックの」
とで喧嘩して」

「へー」

確かに今と変わんないな。

「でもね、一つだけ変わったことがある」

「え？何？」

「自分を犠牲にしてまで戦ったんでしょ？そんなの私が見たなかで一度も無かったよ」

そうか。

「おーい、服部。時間だ」

「石田さん。後はゆっくり休んで」

「ん、ありがとー」

「じゃ、お言葉に甘えて」

「だめよー、飯塚。女の子と二人っきりだからって、やましいことしちゃう」

「ちよっ・・・」

「はっはっは、大丈夫だ。こいつに女としての魅力は一つもない」
「酷くない!？」

そんなこんなで夜は明ける。

また俺達は日を拝めることが出来るのか。

最終突撃令　く侵入く

朝八時。

俺達の二台の車は蓮田製薬本社ビルの前にいた。

「ついに来たか・・・」

見ると屋上には自衛隊のへり。

隊員らしき人がメガホンを掲げてこっちに叫んできた。

「屋上まで上がってきてください！私達は蓮田製薬との契約上中に入ることは出来ないので自力で上がってきてください！」

「だつてさ」

俺は隣にいた石田に話しかける。

「上等！」

「みんなは？」

『もちろん！』

おお。

ここまで息が合うとは。

「そっか」

俺は手でメガホンを作り屋上に向かって叫ぶ。

「今行きまーーーーーす！！！！！」

ベーターまで行くか」

俺達は集団で固まりながらエレベーターまで歩いた。
エレベーターの前にはこんな張り紙があった。

「屋上へ避難する方はエレベーターをお使いになり、八階までお進みください。なお、そこからは階段で屋上まで登っていただきます」

「ふーん・・・」

俺はエレベーターに乗るためにボタンを押す。
すると最初から一階にあったのか扉が開いた。

「行くぞ」

俺は皆を促してエレベーターに入り、八階を押した。

「油断すんなよ。何が出るかわかんねえからな」

しかし俺は内心安堵している部分もあった。

四階に達した時エレベーターいきなり止まった。

「な、なんだ!？」

エレベーターの扉が開く。

俺はMP5を扉に向ける。

莉久はエレベーターから出て隠し持っていたナイフとUSPを取り出した。

「女一人置いてくわけにもいかねえからなあ」
「飯塚！」

またエレベーターから一人出て行く。
マツチヨメン飯塚だ。

「あんた……」
「だから、女一人置いてくわけにもいかねえって言ってんだろぅが！」

飯塚がチェーンソーを唸らせた。
コイツ……。

「お前莉久が好きなのか？」
「バ、バツキヤロオ！ 違いやい！」

嘘つくなよ飯塚。
顔が赤いぞ。

「ここはお前らに任せていいんだな？」
「ああ……先行つてろ」

飯塚、それは死亡フラグだ。
とは俺は言わなかった。
何故なら。

「私のマジック！とくと見るがいいわ！」

奴のマジックで消してくれるだろ。

「生きて帰って来いよ」

「もちろん！」

莉久はとびっきりの笑顔を見せて振り返った。

それが最後に扉は無常にも閉まっていった……。。

最終突撃令　〜決闘〜

「……………」

莉久たちが降りてからエレベーターは特に止まることはなく、俺達は無言に包まれていた。

たまに轟音や、爆発音が聞こえる。それだけ激しい戦いなのだろう。

ポーン

八階になり、エレベーターは止まった。エレベーターでいける最高階だからだ。

「降りるぞ」

俺は一言そう言い、ドアが開くのを待った。だがしかし。

「お待ちしました」

そこにいたのはいつか見た鉄仮面だった。佐伯先輩に切られた右腕は既がない。しかし、傷口は塞がっていたようだ。

「またアンタか」

俺はMP5を構える。

「しつこくてすいません。しかし、あなたには用はないんですよ」
「何だと？」

「私が用のある人。それは……」

鉄仮面はその顔を仮面越しでも分かるぐらいに歪めて笑った。

「飛驒陽子。あなたにはここで死んでもらう」

そういつて鉄仮面は腕を陽子に伸ばした。

「そうはさせない！」

しかし、佐伯先輩が日本刀を振りかぶりその腕を切りつけた。それに反応した鉄仮面は寸でのところで避け腕を引っ込める。

「おい、お前は何故飛驒を殺そうとするんだ？」

「そいつは……私の人生を滅茶苦茶にした!!」

「どういうことだ？」

「そいつは私の居場所を無くした！私の味方を殺した！私の全てを消した!!」

そう叫んだ鉄仮面は肩で息をしている。

「飛驒……どういうことだ？」

「私は……何もしてない……」

飛驒は俯いて小さな声で言った。

「違う！そいつは嘘を言っている!!」

「だとしても……俺は飛驒を信じる!!」

「敦……」

俺はこんなことで動揺なんてしない。
覚悟したから。

工場の地下で皆と約束したから。

「たとえ飛驒が最悪な奴だとしても……俺は飛驒を守りきる！他の皆も！ここに居る全員で！」
「そうだね」

この声は……

「莉久！」

「やあ、どうも」

そこにいたのは体中怪我している莉久と飯塚だった。

「大丈夫だったのか！？」

「うん、意外と簡単だったよ」

「その割には怪我してんじゃねえか」

「ハハ、まあね」

莉久は笑顔だった。

どうやら得意のマジックで死亡フラグは消したらしい。

「僕達は全員で帰る！たとえ世界を敵に回しても！」
「ああ、俺もだ！」

飯塚と莉久は互いの肩を組みながら叫んだ。

「帰るしかねえよな」

対馬は俺の真横に着いた。

「帰る理由は？」

「そりゃ石田にこくひん……ってオイ」

全く。

対馬は素直じゃないな。

「私だって、敦と帰って結婚するんだ」

そういつて出てきたのは亜由美。

「帰るのはいいが結婚はしない」

「またまた、ご冗談を」

「冗談じゃねえ!!」

「俺も」

「私だって」

皆帰りたい気持ちは一つ。

そのためにここまでできたんだ。

負けるわけにはいかない。

「この通り俺達は帰りたいんだ。さっさとそこをどいてくれ。どかないなら力づくで通るまでだが」

鉄仮面は動揺しているようだった。

「くっ……。私も君達の仲間に入りたかったよ……。しかしもう遅い。その女を殺すまでは私も帰れない。いや……。もう帰る場所何てないんだけどな。全力で戦わせてもらおう。この仮面ももういらぬ。邪魔なだけだ」

そう言っつて仮面を投げ捨てる。

仮面の下にあつた顔は……

「い、院長!？」

「そうだ、私だ。しかしそれもいまは関係ないだろう?さて……。勝負と行こうじゃないか!!」

俺と対馬はMP5を構え、佐伯先輩は日本刀を向ける。

ポロポロの飯塚はチェーンソーを。

莉久は右手にナイフ、左手にUSPを向ける。

石田は金属バット二本。

その他の奴らもそれぞれ自分の得物を構える。

「いいかみんな。絶対に死ぬな。死にそうになったら敵に背を向けてでも全力で逃げる。俺達の最終目的はこいつを倒すことじゃない。生き延びることだ!いいか……。?行くぞ!TBS!」

『おっ!』

この掛声が、最後の戦いのゴングだった。

最終突撃令 〵決着〵 (前書き)

お久しぶりです！

結構時間が空きましたねw

それではどうぞ。

最終突撃令 へ決着へ

「潰れなさい！」

鉄仮面、もとい院長が俺達めがけて腕を振りかぶってくる。

「おおっと！」

俺は横に跳躍してよけたが何人かが取り残されてしまった。

「危ない！」

といつたが先か後か。

ガキン！という音に阻まれて声を消されてしまい、誰もが目を白黒させる。

「何！？」

その腕の下で耐えているのは石田。

金属バットを二本クロスして耐えている。

「ぐっ・・・！」

「大丈夫か！？石田！」

「いいからはやくあいつを撃て！」

その言葉で我に返った俺と対馬はMP5を院長に向けて乱射した。頭を狙ったつもりだが、反動でそれてしまい全て胴体に当たった。

「チッ！」

院長は腕を戻し右へ跳躍。

しかしそこには唸るチェーンソーを構えた飯塚がいた。

「くっ!？」

「遅い!」

飯塚はチェーンソーを振り下ろした。

しかし院長はそれを右手で防いだ。

右手にはガントレットか何かがはめられているのだろうか。

その右手からは激しく火花が散っていた。

「その状態なら動けまい!」

「!!!??」

今度は佐伯先輩が後ろから院長の首を狙った。

「甘い!」

「え!？」

しかし院長はそれをしゃがんで避け、その刀は飯塚の持っていたチェーンソーにぶつかり無常にも折れてしまった。

「しまった!」

「だから甘いんです、よ!」

そういつて院長は佐伯先輩を殴りつけた。

佐伯先輩はそのパンチをもろに喰らったからだろうか。

数メートル吹っ飛び、背中から壁に激突した。

「先輩！大丈夫ですか！？」

俺は先輩の下へ駆け寄った

「ええ・・・大丈夫よ・・・しかし気をつけたほうがいいわ。あのガントレット鋭い爪がついてる・・・」

そういった先輩の頬は少し抉れていた。

傷は浅く、出血もたいした事ないので命に別状はなさそうだが、なによりダメージが酷い。

それに壁にも激突したんだ。

もしかしたら骨にヒビぐらい入ってる可能性だってある。

「先輩は少し休んでいてください」

「わるいわね・・・あ、そうだ」

「何ですか？」

「もしかしたらだけど・・・」

「くそっ！」

「だから銃なんて聞かないって言うてるでしょうが！諦めてその女を出したらどうですか！？北村君！」

俺は敦が佐伯先輩の介護をしている間、奴に銃撃を浴びせ続けた。しかし、本当に効いていないのかびくともしない。

頭には何発かは当たったはずなのだが、それも効かなかった。

「うらあああ！」

「ワンパターンなんですよ!!!」

飯塚がチェインソーを振り回し奴に当てようとしたがそれもガン
トレットではじかれる。

「これでどうだ！」

「何!？」

ここで莉久が駆け出し、奴の頭めがけてナイフを振り下ろした。
しかし、奴はそれを何とか避けたがその攻撃を予想していなかつ
たのか。

完全には避けきれず、顔を少し切られた。

「まさか私に当てられるとは・・・不覚でした」

奴の顔からは血が流れていた・・・。

ん？血が流れている？

何故再生しない？

もしかして。

「おい、あんたもしかして切り傷は再生できないんじゃないか？」

「!？」

「本当か!？敦！」

「だって・・・見てみるよ。今莉久がナイフで切ったところを再生
してないだろ？」

「本当だ・・・」

莉久が切った傷はやはり再生してない。

「北村君、あなたが言ったことはほぼ正解です。しかし完全ではありません。まあ、この際教えちゃいましょう。私の体は傷が貫通しない限り『傷』と認められず再生しないんです。だから掠ったりとかは再生しないんですね。切り傷はもつてのほかです。その他頭部は再生できません」

院長は大きく息を吸う。

「まあ、トリックが知られてもやらなければいい話なんですけどね!!」

院長は大きく地面を蹴って俺の元まで跳んできた。

「あの女をこちらに渡しなさい! そうすれば助けてあげましょう!」

「渡さないって! 言ったでしょうが!!」

俺はそれをバタフライナイフで応戦。

腕をはじめ、バックステップで後ろへ下がり距離をとる。

どうすれば良い?

皆を守るために、何が最善の手だ?

今俺が持っているものを整理してみるか。

・MP5 貫通しちゃいけないんだよな。それにあんなに動く奴の頭部に当てる自信がない。

・USP 上に同じく。

・バタフライナイフ いやいや、俺にそんな腕は無い。

・火炎瓶 使えそうな気もするけど・・・俺達の自身の動きを防ぐことになるもんな。

・スタングレネード やつぱりこれか？

結論

スタングレネードが有効。

ただスタングレネードを使ってもばれちまえばオシマイだ。

院長はそこら辺にいるゾンビとは違う。

どうする？

・・・そうか。

いやしかし、これに気づいてくれる人が三人以上はいないと止めを刺せない。

賭けるか？

「どうしたんですか！北村君！！やっとあの女を渡す気になりましたか！？」

「いや」

おれはベストに入っているスタングレネードを取り出す。

「渡さないって！俺達は皆で！！」

俺は院長の懐に走る。

未来を勝ち取るために。

「ワンパターンにも飽き飽きですね！！」

院長はそんな俺に手を伸ばしてくる。

しかし、今の俺は誰にも止められない。

俺は首だけ動かし、避けた。

しかしどうやら頬を掠めたらしい。

肉が少し抉られた。
でも！

「何！？」

「逃げ切るんだあああ！！！！」

スタングレネードのピンを抜き院長の顔の前に投げる。

「スタングレネエエエド！！！！」

俺はUSPを抜くのと同時に目を瞑り耳を塞いだ。

その直後、キーーーーーー！！！！

という音が塞いだ耳に聞こえた。

そして俺は目を開けUSPを院長の頭に突きつける。

まだ少しモヤが掛かっていて良く見えない。

緊張の一瞬。

この作戦に気づいた者、すなわち院長にいつでも止めをさせる状況を作っている者。

それは俺と、対馬と……………佐伯先輩。

俺はUSPを院長の頭に。

対馬はナイフを首に。

佐伯先輩は折れた日本刀を首につきつけていた。

「アンタの負けだ。院長」

「……………そのようですね。もう下ろしてください、何もませんか」

俺は不思議とUSPを下ろした。

「何で下ろしてるんだよ!？」

「もう大丈夫だ。安心しろ」

そういつと対馬と佐伯先輩はしぶしぶ下ろした。

「・・・ありがとうございます」

「さて、院長。色々と聞かせてもらおうか」

「分かりました。さっきも良いましたが、あの女は私から文字通り全てを奪いました」

「全て？」

「ええ、全て。私の体も、仕事も、病院の人たちも!!」

「!？」

「あの後、襲撃されたんです。それは私があの子の指示を無視したから」

「ち、ちょっと待って!指示って何だよ!？」

「あの女は今回の事件の黒幕・・・」

院長は一息つくところ言った。

「飛騨陽子、彼女は今回のウィルスを作った張本人であり、ウィルスをばら撒いた犯人です」

「な!？」

その瞬間、銃声が轟き院長の頭に風穴が開いた。

院長はゆっくりと倒れ小さな声で

「逃げてください・・・」

と言っ。

「喋りすぎなのよ、あなた」

「お前……！」

その後ろで煙の出ているUSPを握り、冷たい目で院長を見ているのは飛驒だった。

最終突撃令　　↓決着↓（後書き）

はい、飛驒が今回の事件の犯人です。

何故、ウィルスをばら撒いたのか。

それは次回分かります。

・・・まあ何時になるか分からないけどWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2652v/>

逃げる16の夏

2011年12月31日21時47分発行